

# 千年村プロジェクト

2023 年度

## 琵琶湖湖東疾走調査



早稲田大学理工学術院 創造理工学部建築学科 建築史研究室 中谷礼仁研究室

千葉大学大学院 園芸学研究科 緑地環境学コース

環境造園領域 都市環境デザイン学研究グループ 木下剛研究室

慶應義塾大学環 環境情報学部 石川初研究室

東京都市大学 建築都市デザイン学部 建築学科 福島加津也研究室

東京大学生産技術研究所 林憲吾研究室

滋賀県立大学 環境科学部 環境建築デザイン学科 川井操研究室

田熊隆樹

松木直人

高橋大樹

金盛晋也

近藤真

東京大学 神田芽ぶき

横浜国立大学 松下琴莉

立正大学 奥村敦至

2024 年 3 月

## 千年村プロジェクトについて

〈千年村〉とは、千年以上にわたり、度重なる自然的社会的災害・変化を乗り越えて、生産と生活が持続的に営まれてきた集落・地域のことをさす。

千年村プロジェクトは、全国の〈千年村〉の蒐集、調査、公開、顕彰、交流のためのプラットフォームとして構想された。2011年に発生した東日本大震災後に、優れた生存立地を発見しその特性を見出す必要性を感じたことがその発端である。関東と関西にその研究拠点をもち、環境・地域経営・交通・集落構造という4つの要素を重要視し、それらに関する諸分野の研究者・実務者によって運営されている。

また、この活動は2014年～2017年度科学研究費助成事業「国土基盤としての〈千年村〉の研究とその存続のための方法開発」に採択されている。

様々な圧力を受け、変容を受け入れつつも、長らく存続してきた歴史を持つ地域には、生産性や防災性、経済的交流の基盤などが構築され、持続可能な土地固有のシステムが育まれてきたと考えられる。山際の集落、その眼下に広がる水田、集落を護る鎮守の森、他所へ通じる峠道、異国へ向かう海原。日本における地域の多くにはこうした共通する特徴が具備されている。しかし、これらの特徴は突出した文化財的指標というよりは、むしろ健全な国土を日常的にささえるものとして評価されるべきであろう。

千年村プロジェクトは、そのような地域に実際に赴き、環境・地域経営・交通・集落構造の各視点から、地域が持続してきた要因の分析を行っている。そしてその地域が良好な生存条件を保っていると確認できた場合、その地域を〈千年村〉として認証する。認証によって、当該地域の持続要因を理解していただくとともに、これからの千年に向けた持続可能な地域づくりの支援を行うことを目標としている。

# 目次

第1章 基礎研究編.....	4
第2章 本報告書の目的.....	5
2-1. 本報告書の目的.....	5
2-2. 調査の位置づけ.....	5
第3章 2023年度琵琶湖湖東疾走調査 各村の報告.....	7
第4章 2023年度琵琶湖湖東疾走調査 考察.....	
5-1. 千年村候補地における渡来人集落の風景(中谷).....	
5-2. 古代郷の比定地と神社の氏子区域：蒲生郡安吉郷と苗村神社(木下).....	
5-3. 湖畔の疾走調査(石川).....	
5-4. 連続しているように見えるとき(福島).....	
5-5. 聖と俗の二つの中核(林).....	
5-6. 蚊野郷周辺における依知秦氏の開拓史(川井).....	
5-7. 小さな発見たち -琵琶湖湖東千年村候補地の集落構造-(田熊).....	
5-8. 千年村パタンランゲージの活用による新たな千年村「松杣郷」発見の経緯(金盛).....	
5-9. 驚きかたの「インストール」：蒲生郡桜川村を例に(近藤).....	
5-10. 甲良町の千年村大字 -古代から歴史を追える地域の環境要因の分析-(高橋).....	
第5章 付記.....	
第6章 謝辞.....	

# 第1章 基礎研究編

## 『倭妙類聚抄』記載地名の現在地比定による千年村候補地の発見

千年村候補地をひろく全国から発見するために、平安期辞書『倭妙類聚抄』に記載される古代地名と、それらを現在地へと否定した既往研究の成果を用い、空間的にプロットした。それらを千年前から現在まで空間的に接続する千年村候補地とした。

主要参考文献は『角川日本地名大辞典』である。ここには『倭妙類聚抄』記載地名の現在地比定に関する先行研究がまとめられている。その比定精度は、以下の7つに分類される。

1. 単一の大字に比定される
2. 複数の大字に比定される
3. 市域に比定される
4. 河川流域などの複数の市域にまたがる範囲に比定される

5. 比定に関する説が異なる
6. 比定地は未詳とされる
7. 比定地に関する記述がない

本プロジェクトでは、以上のうち現在の行政区画・大字領域に比定されるものを抽出しプロットしている。その数は『倭妙類聚抄』記載郷名 4020 個のうち 1994 箇所である。その中でも、大字領域への比定数には地域差が見られる。また、『和妙類聚抄』制作時の古代国に該当しない北海道、青森県、沖縄県にはプロットがなされていない。

しかし、古文献記載地名の現在地比定地の可視化という手法は、『倭妙類聚抄』以外の文献にも展開でき、同文献では発見できなかった千年村候補地を発見することが可能である。

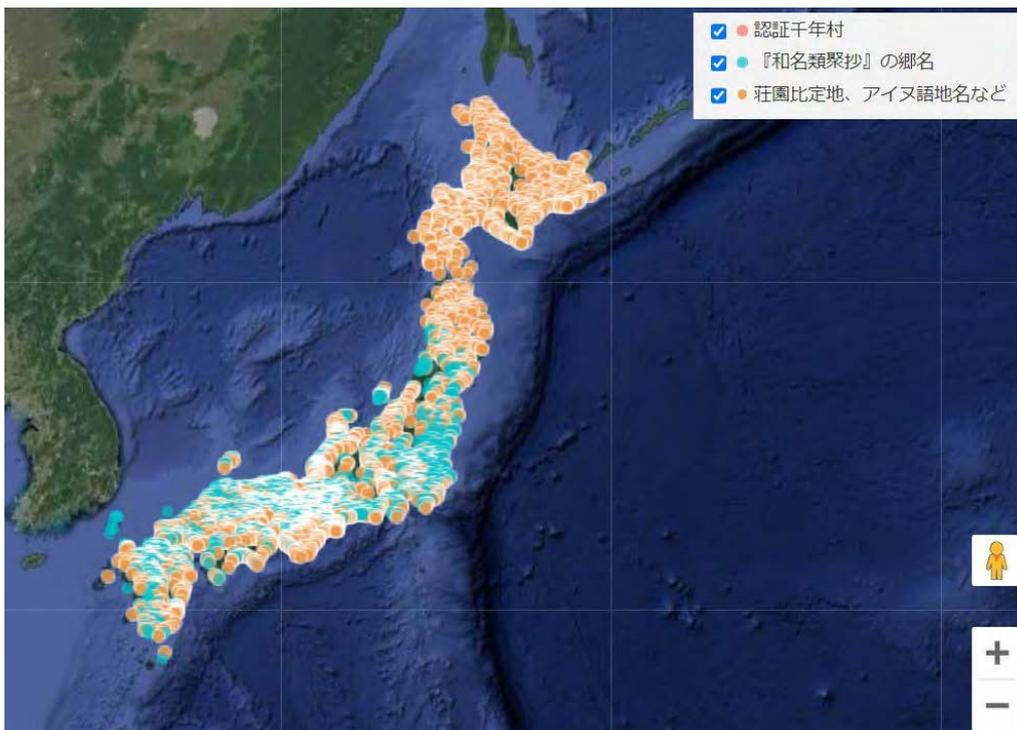


図1 千年村候補地のプロット(千年村 HP より引用 : <http://millivill.org/%E5%9C%B0%E5%9B%B3%E3%81%8B%E3%82%89%E3%81%BF%E3%81%A4%E3%81%91%E3%82%8B>)

## 第2章 本報告書の目的

### 2-1. 本報告書の目的

本報告書は2023年10月7日から8日にかけて行われた琵琶湖湖東疾走調査において得られた知見および考察を報告することを目的としている。

### 2-2. 調査の位置づけ

本研究は今後の集落調査の存続のための評価手法の開発を目的としている。千年を超えて生産と生活が持続していると考えられる地域を千年村候補地とし、その持続要因に関する調査を行う。そしてその地域が良好な生存条件を保っていることを確認した場合には、その地域を〈千年村〉として認証する。〈千年村〉は日本の国土の土地利用と景観の基層をなしてきたと考えられ、これらの正当な評価手法が必要である。

そのために以下の3つの段階を達成していく。

(1)平安期文献『倭妙類聚抄』に記載された「郷」の比定地をベースとした全国の千年村候補地のデータベースの作成および公開

(2)千年村候補地を「環境」「地域経営」「交通」「集落構造」の視点から調査し、それらの関係性および持続要因を解明

(3)各地域の存続に関する普遍的要因と歴史的要因を元にした〈千年村〉の認証基準と存続手法の開発

上記の実現のためには、より多くの千年村候補地を網羅的に調査することが必要であり、本報告書で報告する琵琶湖湖東疾走調査はそのひとつとして位置づけられる。

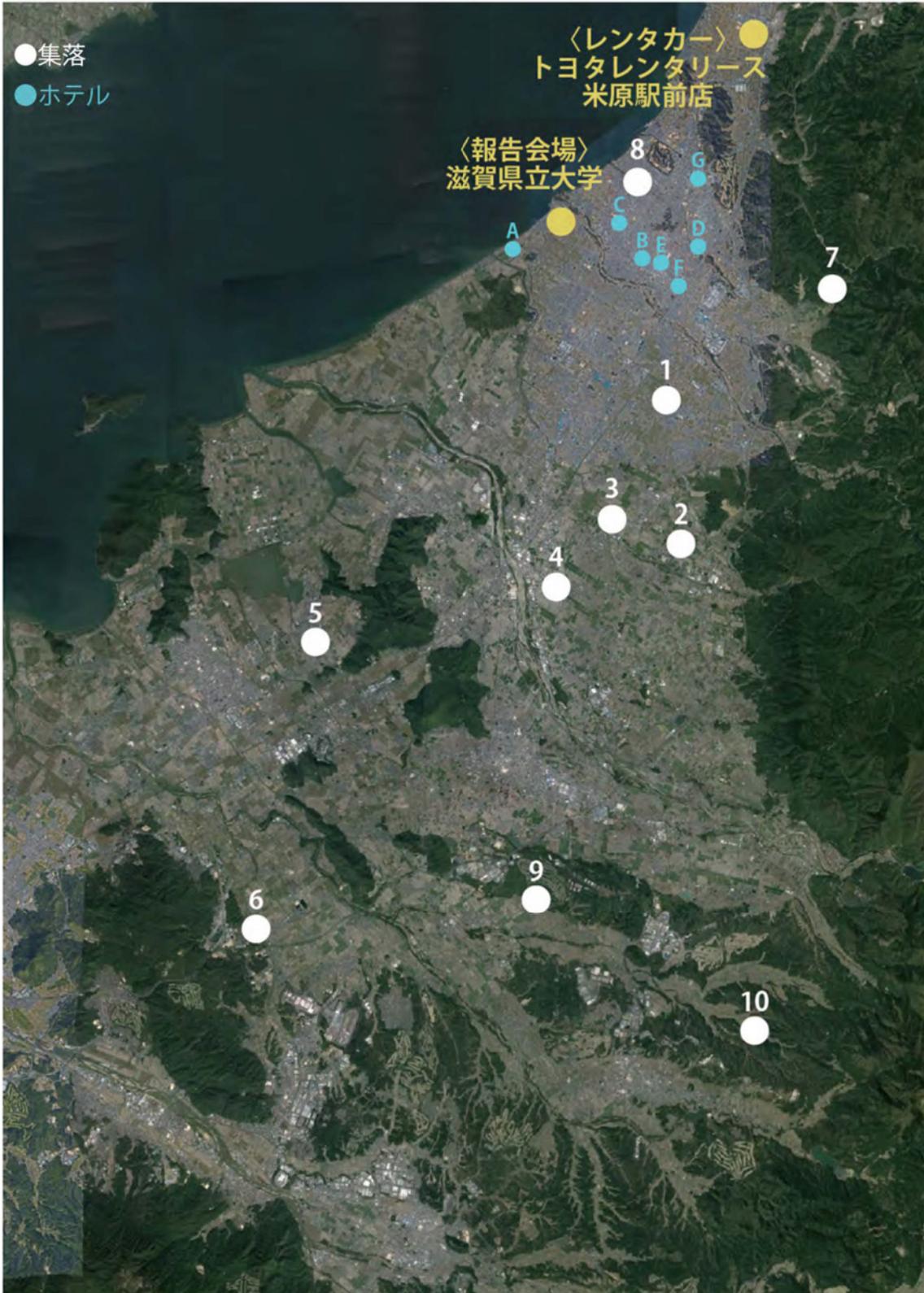


図 2 2023 年度琵琶湖湖東疾走調査該当集落

## 第3章 2023年度琵琶湖湖東疾走調査 各村の報告

第3章では2023年度琵琶湖湖東疾走調査において  
悉皆的に調査を行った10村の概略を以下の5つの視点から示す。

- 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報
- 2) 実見によって得られた客観的情報(環境・地域経営・交通・集落構造等)
- 3) 考察
- 4) 集落を象徴する風景と名前
- 5) 断面ダイアグラム

01 犬上郡尼子郷(いぬかみぐんあまごごう)

02 愛知郡蚊野郷(えちぐんかのごう)

03 愛知郡八木郷(えちぐんやぎごう)

04 愛知郡大国郷(えちぐんおおくにごう)

05 蒲生郡篠筥郷(がもうぐんささけごう)

06 蒲生郡安吉郷(がもうぐんあきごう)

07 犬上郡神戸郷(いぬかみぐんかんべのごう)

08 犬上郡青根郷(いぬかみぐんあおねごう)

09(1) 石塔寺・綺田町(いしとうじ・かばたちょう)

09(2) 石塔寺・綺田町(いしとうじ・かばたちょう)

10(1) 日野町大字小野(ひのちょうおおあざこの)

10(2) 日野町大字小野(ひのちょうおおあざこの)



図1 比定の大字領域(筆者加筆) GoogleMapより



図2 土地条件図(筆者加筆) 国土地理院より

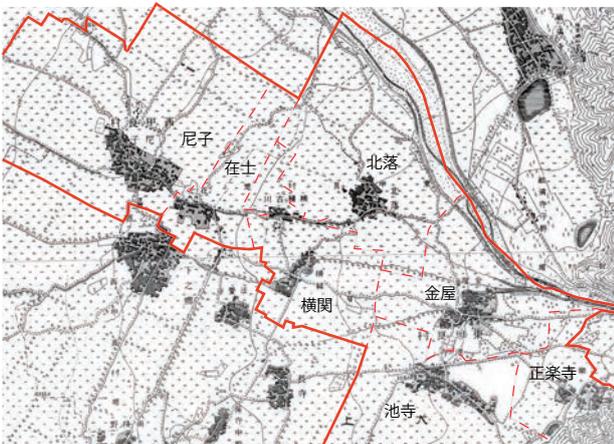


図3 旧版地形図(筆者加筆) 今昔マップより



図4 犬上郡第18区金屋村絵図 犬上郡各村絵図より

## 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

犬上郡尼子郷は、現在の甲良町大字尼子、在士、北落、池寺、金屋、正楽寺に比定されている。

土地条件図によると、東側の山から西側の琵琶湖に向かって犬上川が流れており、南岸には広大な沖積扇状地が形成されている。多くの集落が旧河道沿いに並んでいる。

扇状地帯の中央部で、井水に乏しく灌漑用水の確保に苦しんだ地域で、水源の争いが続出していた。尼子氏の発祥地として有名であり、多数の遺跡が存在している。(『角川日本地名大辞典』より)

## 2) 実見によって得られた客観的情報

扇状地の扇頂から扇端への順序で、正楽寺、金屋、尼子を重点的に調査を行った。

### ・環境

正楽寺：勝楽寺の近くに位置する西蓮溜は、犬上ダムとつながる溜池群の一部である。溜池の水は、集落内の溝を通じて分配され、水田や畑の灌漑に利用されている。

金屋：過去十数年前に整備された三川分水公園がある。犬上川の分水点は、さらに上流部に位置することが判断された。

中央地域(北落、横関、在士)：横関から古川の流れが在士を経由して尼子に流入していることが明らかになった。

尼子：建築密度は他の地域よりも高い。主要道路沿いには重要な水路が流れており、その支流は分水装置を介して建物の間や小道に流れ込み、池と共に水のネットワークが形成されている。

畑では、お米や枝豆などが主要な作物として栽培されている。

### ・集落構造

全体的には、金屋・在士・尼子などの集落が水路沿いに順番に位置している。集落は畑や水田に囲まれており、外縁には神社がある。

### ・社会文化

集落の間の交流は訪問する程度にとどまる。それぞれの集落の中、コミュニティ活動や神社を中心に祭りが行われる。その中で、金屋のヤッサや正楽寺の若い衆などの文化が特徴的である。また、宗族関係については、正楽寺地域にある勝楽寺の佐々木道誉が尼子氏の本家であると考えられている。尼子氏の発祥地である土塁公園には、遺跡が残っている。



図5 尼子 分水路(酒田撮影)



図6 尼子 水道で設置した踏板(羽賀撮影)



図7 尼子 集落の中にある水路(石川先生撮影)

### 3) 集落を象徴する風景と名前

「水流の郷」

集落全体として、川や水路沿いに人の暮らすエリアが広がっていることが最大の特徴であると言える。

田畑の作業のための農業用水としてだけでなく生活用水としても利用されている形跡が今でも残っており、それは下流に行くほど水との距離の近さを感じた。それぞれの家を通るように水路が複雑に分水して尼子の家々の間を通っており、家の敷地内を通っている水路も多い。(図5)家の出入り口に近い場所に、水路に向かう階段があり、かつては食材を洗ったり洗濯をしたりされたような跡があった。また、水路にベンチのようなものがあり、そこに足をかけて憩いの場として機能していたような痕跡もあり(図6)、非常に水に近い生活をしていたことが分かった。(図7)

### 4) 考察

下流に行くほど川が分水されて一人一人の生活を潤していた感じが感じ取れたが、上流ではまだ流れも早く雨が降った際増水の危険があったためか、水とはある程度距離を保っていたように感じた。

そして村同士の水を巡った争いは生まれ、時には上流で水を止めて下流への供給を止めることもあったようで(村人インタビュー)、上流にすむ家が権力を持っていたと考える。また、権力のある家が、寺や神社などを建て、信仰を使って集落全体への権力をより強固にしていたようで、水に関する上下関係が生じた。下流の人々は各家に分水して支え合って生きているのに対して、上流では分水せず権力を持っているものが独占していたように感じた。

### 5) 断面ダイアグラム (図8 参照)

#### 参考文献

竹中理三他編『角川日本地名大辞典』角川書店、1994年  
 犬上郡第18区金屋村絵図 犬上郡各村絵図より

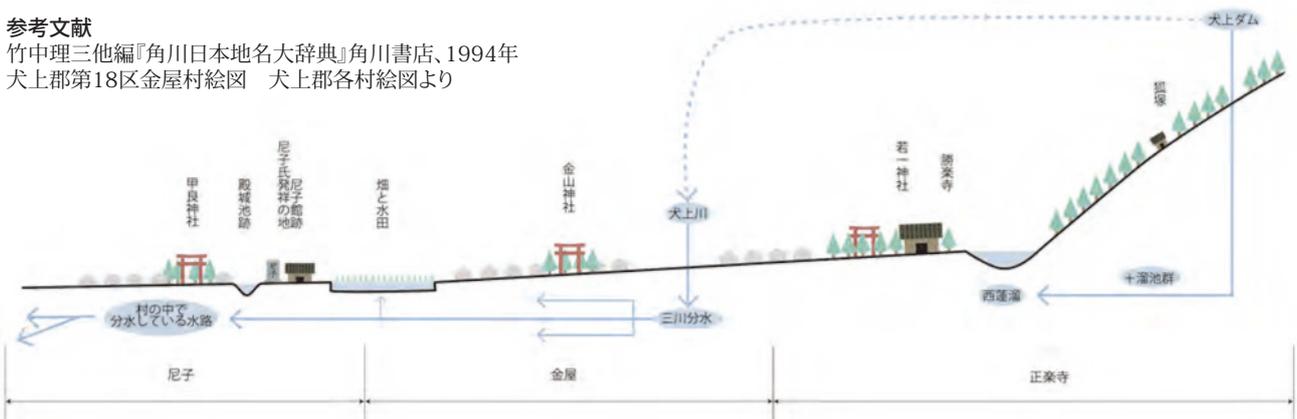


図8 断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域 (Google map より)

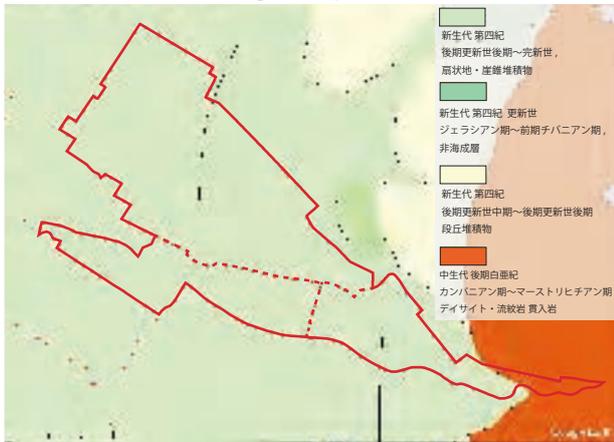


図2 『20万分の1日本シームレス地質図V2』 出典：産総研地質調査総合センターウェブサイト (<https://www.gsj.jp/HomePageJP.html>) 郷域・凡例 (筆者加筆)



図3 今昔マップ (『今昔マップ on the web』より)



図4 蚊野のメインストリート (中村撮影)

### 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

愛知県蚊野郷は現在の愛荘町蚊野・蚊野外・上蚊野に比定されている。

宇曾川の流域に位置し、扇状地上である。蚊野の集落は扇状地の端部にできている事がわかる。航空写真と今昔マップを比較すると、今も昔も集落の周りには水田が広がっており、稲作が営まれてきたことがわかる。水田は広葉樹で区切られていた。

宇曾川沿いには針葉樹林が広がっていたが、現在は工場地帯となっている。金剛寺野古墳群等、遺跡が複数発見されている。

### 2) 実見によって得られた客観的情報

今昔マップによって集落が確認できた蚊野と上蚊野を実見した。この二つの地域について報告する。

#### ・環境

郷内では水路が多く見られ、どこも豊かに水が流れており、水資源に恵まれていることが見てとれた。集落の周りには水田が広がっていた。集落間の高低差は感じられなかったが、蚊野でのヒアリングにより、1959年の伊勢湾台風で宇曾川が氾濫した際、軽野の集落から蚊野外に被害が広がったが、蚊野の集落には被害が及ばなかった事がわかった。

#### ・地域経営

〈蚊野〉稲作で発展した。集落の中心にメインストリートがあり、昔はえびす講が行われ、他の集落からも人が集まった。

#### ・集落構造

ヒアリングにより集落内では同じ名字を持つ家が多数あることがわかった。〈上蚊野〉同じ家紋をつけた家が多数見られ、ヒアリングで同じ血を引く親戚が集落内に多く住んでいることがわかった。〈蚊野〉家を建てる時など、集落内で協力して行っていたという話を伺った。ヒアリングによると、集落間では水利を巡った上下関係も存在した。宇曾川は上流から松尾、上蚊野、蚊野、軽野の順で流れているが、水利権は松尾、蚊野、上蚊野の順で存在した。また蚊野は松尾から水を盗っても良く、上蚊野は川から水をとって良いという決まりがあったそうだが、上蚊野と蚊野間での水の取り合いがあったという。



図5 蚊野のお宅で見ていただいた写真(筆者撮影)

水利権の順番

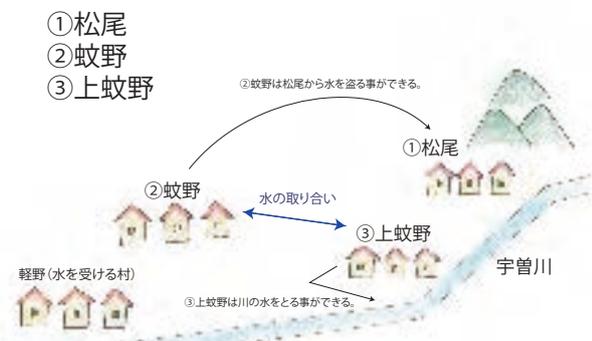


図6 水利を表す図(筆者作成)



図7 集落の周囲に広がる水田の風景(中村撮影)

3) 考察

宇曽川の豊富な水資源を利用して稲作で栄えた。特に蚊野の集落では水害からも逃れられている。もともと「蚊の野原」と呼ばれるほど鬱蒼としていた上蚊野の針葉樹林が売られて、現在は工場地帯になっている。このように宇曽川を活かして発展してきた地域であることがわかった。

また、集落内での繋がりも感じられた。お話を伺った上蚊野の集落、蚊野の集落のどちらも同じ名字の方が多く住んでおり、上蚊野では同じ家紋をつけた家が多数見られ、蚊野では集落の方達が協力してお家を建てている様子の写真を見せていただいた。集落内では血のつながりを大切にしている様子だった。集落間では水利権を巡る上下関係があったというお話を伺った。

これらのことから愛知郡蚊野郷では宇曽川と共存した、集落間というより集落ごとの繋がりが見られる暮らしがなされていることがわかった。

4) 集落を象徴する風景と名前

『川を取り合う水田帯』

宇曽川に関する水利の話が印象的だったことと、現在は農業を辞め、自分たちで食べる分のみを育てているお家が多かったのに対し、郷内を広がる水田の風景が印象的だったため。

5) 断面ダイアグラム

(図版参照) v

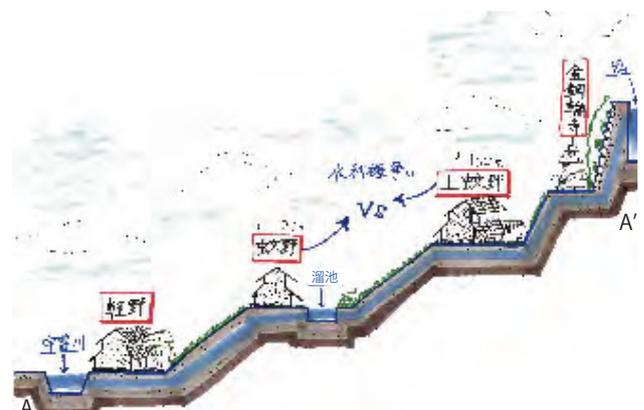


図8 断面ダイアグラム(右図:Google Mapより 左図:片岡作成)

03 愛知県八木郷/滋賀県愛知郡愛荘町下八木・北八木

担当：戸田剣（早稲田大学）

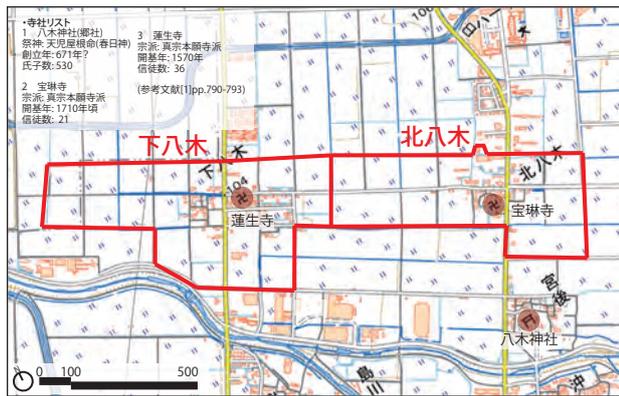


図1 比定の大字領域



図2 土地条件図(国土地理院より)

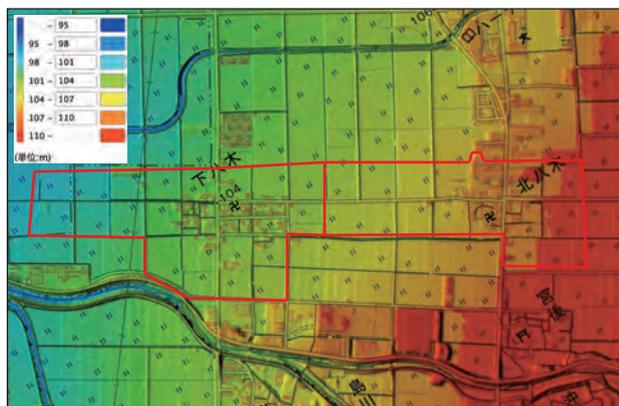


図3 標高メッシュデータ(国土地理院より)

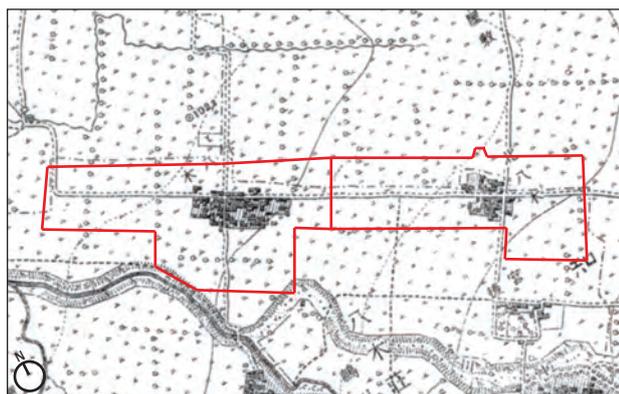


図4 旧版地図(1893年)

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

愛知郡八木郷は現在の愛知郡愛荘町下八木・北八木に比定されている(図1)。土地条件図から、宇曾(うそ)川流域の扇状地が形成する緩やかな斜面地に位置することが確認できる(図2、3)。条里制の整形的な水田区画の中に、集落が点在している。北八木集落南部の宮後には郷社である八木神社が存在する。

かつて農業に適していなかった扇状地を、渡来系氏族が高度な土木・灌漑技術を用いて開発した。北東に隣接する蚊野郷に居住した秦氏は新羅系の氏族であったが、八木郷の戸主の氏族は百済系であった([2]pp.149-150)。

律令制衰退後には寺院系の荘園領地が散在し、室町、桃山時代にかけては数々の土豪や戦国大名の支配を受けた。江戸時代には彦根藩の所領となった。明治22年の町村制施行により周囲の12村と共に八木荘村となった(蚊野外、香之庄、元持、沖、宮後、北八木、下八木、島川、長塚、栗田、野々目、南野々目、矢守)。( [1]pp.749-759) 下八木村は堤康次郎(西武グループ創業者)の出身地であり、生家が現存する。

2) 実見によって得られた客観的情報

北八木、下八木集落全体と、八木神社を実見した。

・環境

宅地は周囲の水田よりも高く、石垣で造成されていた。石垣下部は道路に埋まっており、現在の道路を建設する際に盛土が行われたと考えられる(図5)。

・集落構造

両集落とも、内部に水路が網の目のようになっていた。これらはかつての生活用水であったと推測される(図6)。下八木集落の外周部は比較的大きな水路が通っており、環濠のようにも見受けられた(図7)。

・共同体

各集落の中央部に浄土真宗の寺院が存在し、住民はこれらの寺院の壇家であると推測される。

郷社である八木神社の寄付看板を確認した。宮後、下八木、北八木の住民のみならず、宇曾川より南部の沖、香之庄、栗田、島川、元持からの個人寄付も多数記載されていた。また近隣大字の上蚊野、長塚や、他市町村、県外を含む遠方からの寄付も存在した。



図5 北八木集落の北端 (著者撮影)



図6 北八木集落内部の水路 (著者撮影)



図7 下八木集落の北端。左は集落境界の水路。右は農業用水。祠堂の裏で右から左に分流している。(著者撮影)

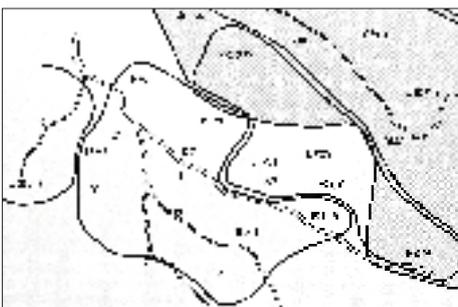


図8 江戸期の八木神社の氏子圏 ([3]p.377より)



図9 断面ダイアグラム(作図: 梁)

### 3) 集落を象徴とする風景と名前

#### ——「湖東平野集落の原型」

下八木、北八木集落は、琵琶湖の湖上交通や中山道の街道交通と直接繋がっていない。そのため、中・近世の商品経済の発展の影響が比較的少なく、集落規模が小規模に留まったと考えられる。このことから二つの集落は、湖東平野における他集落との比較考察を行う際に、一つの基準となりうる「原型」的な集落ではないかと考えられる。

図5~7及び図9に示した通り、集落中央部に寺院が存在し、その周囲を住宅と水路が取り囲む。集落の境界部には神社が配置される。境界部にも水路が設けられ、環濠のように囲われていた可能性もある。こうした小規模で完結的な集落構造が、交通や商品経済と結びつくと、同様の構造を保ったまま大規模化すると考えられる(大国郷の集落が好例である)。

#### 4) 考察——八木郷の郷域推定

彦根藩の寺社の台帳である『彦根藩三筋社堂帳』(1760)に、江戸中期の八木神社の氏子圏が記載されている。八木神社(当時は春日大明神社)は10ヵ村の連名で社堂張に登録された(下八木、北八木、島川、野々目、栗田、沖、蚊野外、香之庄、元持)(図8参照) ([3]pp.376-379)。

2)で述べた、寄付看板に記載のある現代の氏子の居住地の多くは、上述の村と重なっている(蚊野外のみ記載を確認できず)。八木神社は八木郷の郷社であり、氏子圏に律令時代の八木郷の範囲が反映されている可能性が高いため、かつての郷域推定の一助になると考えられる。またこの氏子圏は10大字に跨るものであり、単一大字スケールを超えた規模の村落のまとまりが見られる点でも特徴的である。

#### 5) 参考文献

- [1]『滋賀県市町村沿革史 第三巻』、滋賀県市町村沿革史編さん委員会編、1967年
- [2]『秦荘の歴史 第一巻 古代・中世』、秦荘町史編集委員会、2004年
- [3]『秦荘の歴史 第二巻 近世』、秦荘町史編集委員会、2005年





図5 豊満神社本殿(20231007:碓井颯撮影)



図6 豊満集落内でよく見られる鹿灯籠(20231007:中村文音撮影)



図8 aa断面ダイアグラム(碓井作成・キープランは図1~3を参照) 5) 断面ダイアグラム(豊満集落)

### 3) 考察

豊満神社の境内から道が東西に細かく分岐し家屋郡が立ち並ぶフィッシュボーン型の集落が維持されているのは、集落を南北につなぐ強い軸が参道以外に出現しなかったことが強い原因であると考えている。東西方向に車の通りが多い2本の道路がある(図7:黄色線参照)。参詣道はその2本を直交する線である。参詣道は幅が広く日常的な動線として活用されたので、他に南北方向の道は敷かれず、集落形態が維持されたのではないかと考えられる。

神主曰く豊満神社は春日大社系であり、敷地内には多くの鹿をモチーフにした灯籠(鹿灯籠)がある。私たちはこの鹿灯籠が集落の家屋にも多く建てられていることを調査内で発見した(図7:赤丸参照)。

豊満が古い集落形態のかたちを保ち続けたことは信仰の共同体をも保ち続けることに繋がり、集落内の家屋のほとんどの家で今でも豊満神社の氏子の証である、「鹿灯籠」を見かけられるという目に見えるかたちとして現れたのではないかと思います。

### 4) 集落を象徴する風景と名前

考察を踏まえ、「信仰のかたちが残るムラ」とした。



図7 鹿灯籠の分布を記した豊満集落平面図(碓井作成)  
赤丸:鹿灯籠、緑線:行程。東側が最も灯籠が密に見られ、南側は疎。

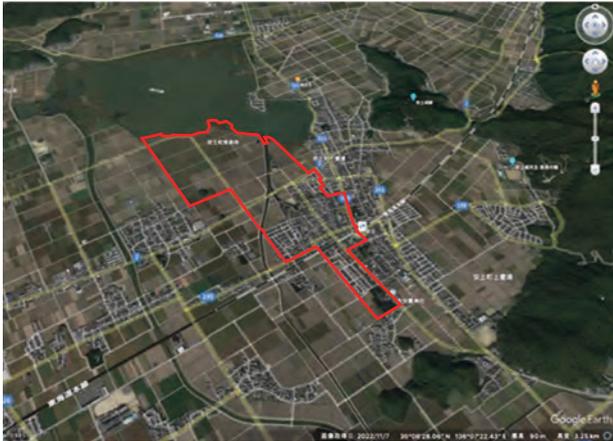


図1 比定の大字領域



図1 比定の大字領域



図3 大中の湖 埋め立て前後の比較

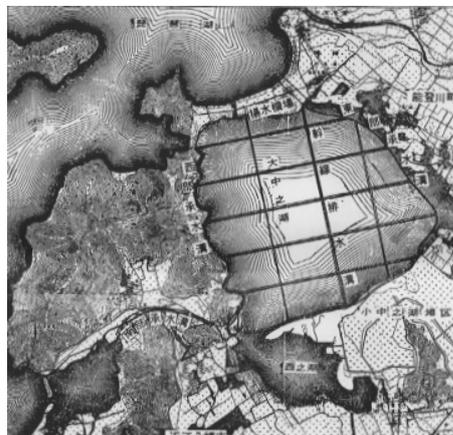


図3 集落から見える常楽寺城跡(小林撮影)

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報  
蒲生郡篠筈郷は近江八幡市安土町常楽寺に比定されている。安土町は古代では沙沙貴山君一族が支配し、瓢箪山古墳はその墳墓として滋賀県内で最大の大きさである。中世に入ると近江源氏佐々木氏の本拠地隣観音寺城を中心に政治が行われ、周囲には沙沙貴神社や観音正寺など佐々木氏縁の社寺が点在している。

2) 実見によって得られた客観的情報

西の湖南東の下豊浦を重点的に実見し、続いて常楽寺、小中を実見した。

・ 環境

この郷では人口地形として農耕平坦化地がみられ多くが農耕地として用いられている。

・ 地域経営

西の湖で陸ヨシの生産が行われている。現存するヨシ事業者の竹田氏によると、以前は5事業者で活発に生産されていたが、現在は1事業者となっている。

簾のような安価大量生産のためのヨシではなく、住宅のインテリアや工芸品として付加価値がつけられたものを生産していた。西の湖では、埋め立てによって利便性の高まった土地には美観を生かした宅地開発がされていた。「レイクビュー」が取れる住宅には高級車が止まるなど、不動産価値の上昇が伺えた。

・ 交通

常楽寺は西の湖から水路がひかれており、これを利用して京都・大阪まで船搬するなど、貿易の中継地として利用されていた。現在では水路の水量や速さを調整しながら、作物を洗ったりするなど生活用水としても利用されていることが実見できた。

・ 集落構造

安土町常楽寺の1番地は佐々木神社が位置する中屋集落にあり、常楽寺という大字は西の湖の南端ま



図4 地域経営の柱であるヨシ(小林撮影)



図5 沙沙貴神社(安永撮影)



図7 物流の中継地点である水路(小林撮影)

で広がっている。神社を起点として集落が形成されたことが考えられる。また、中屋集落はその他集落とは分離しており、信仰とまちの中心地が地理的に分離していることもこの地域の特徴である。

西の湖周辺は安土城下で武家屋敷が広がっていたことから、直線の道に沿うように集落が形成されていた。しかし、沙沙貴神社が立地する常楽寺1丁目周辺では、八幡神社や天満宮を囲み、微高地ながらも等高線に沿って集落が形成されていた。また、この周辺では岩や木などを信仰しており、沙沙貴神社の敷地に対して角度を振った門と参道は特徴的な配置であり「竜石山」を向いていた。

### 3) 考察

- ・琵琶湖につながる水路によって、外部とのやりとりが安易であった。特に、淀川に通じていることで、京都・大阪へも水運で通じていた。
- ・物の輸入が便利のために、安土城の城下町として要所となり、輸出が便利のために良質なヨシを高単価で生産し、京文化に寄与していた。
- ・南に位置する神社が大字の一番地であり、そこから派生した集落であると考えられる。神社は山のそばに位置し、その信仰を表している。

### 4) 集落を象徴する風景と名前 水によって発展し、分離した集落

### 5) 参考・引用

Google Earth 1985/2022

国土地理院 地理院地図

誠文堂新光社 - 日本地理風俗大系

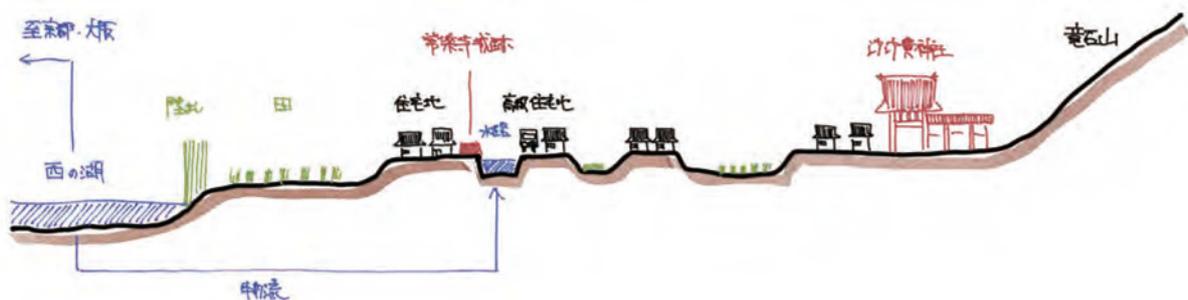


図8 断面ダイアグラム(安永作成)

06 蒲生郡安吉郷 / 蒲生郡竜王町、近江八幡市倉橋市部・上畑・東川

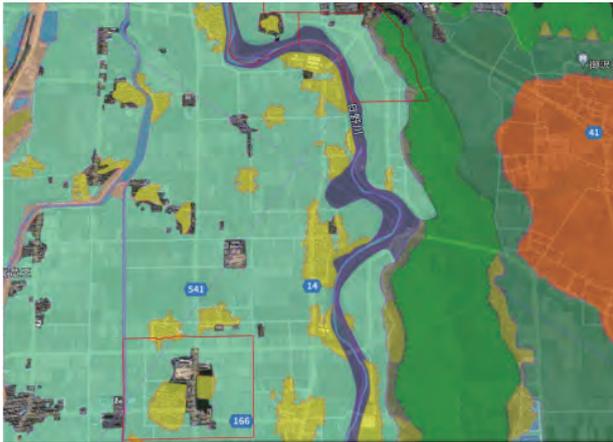


図1 大字領域(秋山加筆)google mapより

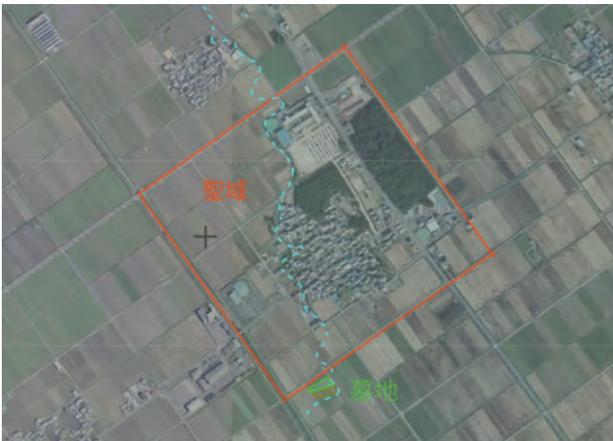


図2 旧河川と現在の空撮(筆者加筆)国土地理院地図より



図3 倉橋部集落(筆者加筆)国土地理院地図より



図4 綾戸集落外周に置かれる石碑(筆者撮影)

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

苗村神社

→くわしい創祀は不詳であるが、社伝によれば垂仁天皇の時代に祖霊信仰により始まった神社とされる。東西に分かれてそれぞれ本殿がある。

・東苗村古墳群

→東苗村古墳群は6世紀後期に築造されたと推定されるもので、8基の円墳が確認されている。

・土地利用

→綾戸遺跡があるがこれは竜王町が拠点集落であったことが考えられる。日野川左岸中央流域の沃野を望む位置にあり、野洲川方面へ抜けるルートを押さえる要地に立地している。

2) 実見によって得られた客観的情報

綾戸と倉橋市部を中心に実見した。

・環境

綾戸: 居住域を中心として、脇には寺社仏閣があり、微高地になっている。外部へ通じている道へは集落を領域として守るように石碑が置かれている。さらにその外部には田や畑が広がっている。これらは条里制によって定められた区画割だと考えられる。竜王町のその他の集落も微高地にできている。

倉橋市部: 里山と河川の周辺にある水田との間に位置している。新しい家屋は古い家屋に対して海拔が低い場所に建っているものが見られた。「いにしへの天智の御代の遊獵しのぶ 端午の祭 流鏝馬の里」\*1とこの地を舞台にした詩が詠まれている。

・集落構造

集落周辺の水田への宅地分散化を防ぐために古くからある住居の敷地が細分化されて新しい家屋が立っている。そのため、居住域はまとまっており、その輪郭は古くからの水路とおおむね一致している。居住空間と寺社仏閣は聖域として捉えられ、墓地は聖域外に位置している。

・地域経営

安吉神社の5/5に開催される弓の行事では以前は8頭の神馬が集まり、郷内各町からの的を持ち寄った。\*2特に日野川を挟んで両岸にある安吉神社と苗村神社は兄弟関係である。

〈参考資料〉

\*1 安吉神社境内看板(10/08/2023調査時)

\*2 滋賀県神社庁HP 安吉神社



図5 旧流路沿いに位置する墓地(筆者撮影)



図6 馬場に続く横長比率の鳥居(筆者撮影)



図7 苗村神社前の馬場(山本撮影)

### 3) 考察

綾戸:

自然堤防の上には住居と神社があることが土地利用図をみるとわかる。この微高地を中心に600m四方が聖域として捉えられていた。居住域の周辺には水路がめぐらされており、その水路と住居の間には余剰地がある。耕地整理によって河川や水路が整理したことが考えられるのでかつての流路を地図上で確認すると旧流路に従って墓地や集落が点在していることが確認できた。

墓地は田んぼの中に唐突に表れているが、1970年代まで地図をさかのぼると墓地の横にはかつて小川が流れ、その影響でできた小さな微高地に墓地も存在していることが分かる。

倉橋市部:

里山の際をそって家屋が並んでいる。かつてからあると考えられる居住域は目の前に広がる田畑に比べ土地があがっている。しかし比較的近年できたように見える家屋は一部水田のなかにも見られる。日野川の人工堤防が強固に整備されたことなどから、海拔が低い位置にも居住可能になったことが考えられる。

### 4) 集落を象徴する風景と名前

〈綾戸馬場〉

神社の前に馬の銅像や馬場が見られた。実際、規模は縮小しつつも現在でもやぶさめが行われているそう。馬場に続いている鳥居も通常に比べ比率が横長である。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

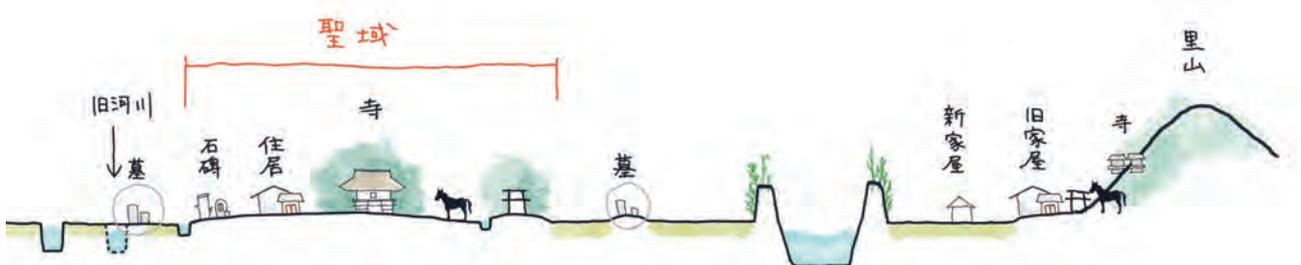


図8 断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域



図2 来栖集落主要部

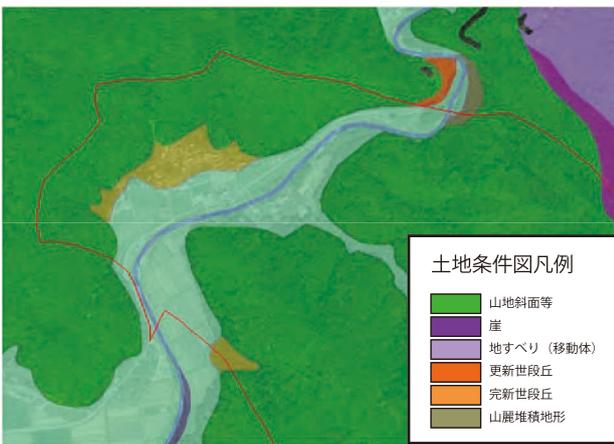


図3 土地条件図



図4 蕎麦の実畑(神田撮影)

## 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

平安期に見える郷名。「和名抄」近江国犬上郡十一郷の1つ。ただし、高山寺本にはない。比定地については諸説あるが、旧久徳(きゆうとく)村栗栖(くるす)は多賀神社の御供所であることから、栗栖を中核とした地域とする「地名辞書」の説が妥当とされている。(『角川日本地名大辞典』より)

明治22～現在の大字名。はじめ多賀村、昭和16年からは多賀町の大字。村(のち町)役場・小学校等、多賀町の行政・教育機関などの集まる中心地。田可(和名抄)・田鹿(平遺164)とも書く。地内に式内大社多賀神社が鎮座する。祭神は伊邪那岐・伊邪那美両神。(『角川日本地名大辞典』より)

## 2) 実見によって得られた客観的情報

### ・環境

鈴鹿山地の麓、琵琶湖に流入する芹川沿いに位置する。

### ・地域経営

昔は稲作を行ってきたが、現在は営農が介入し、そばの実やシャインマスカットの栽培

そばは稲に比べてどこでも育つ。

#### 米がとれない

土壌が悪い(酸性)。

普通の農家より農具も家も小さい。

#### 里芋の栽培

山のふもとのため獣害対策が念入り、畑の囲い→自然と人間がはっきり分けられるようになっている。

畑は借りてる人もいる。

### ・交通

各家庭、車を所持している。

### ・集落構造

総人口25世帯ぐらい

集落の北側の民家は、山に対して横長の平面配置(南向き)で整列している。家屋の横に小さな倉庫がある(農機具倉庫)。

一方で集落の南側の民家は、無秩序。特に規則性は見られない。



図5 獣害対策の檻(口石撮影)



図6 調宮神社鳥居(池尾撮影)と神社前の橋(口石撮影)



図7 集落内看板(萩原撮影)

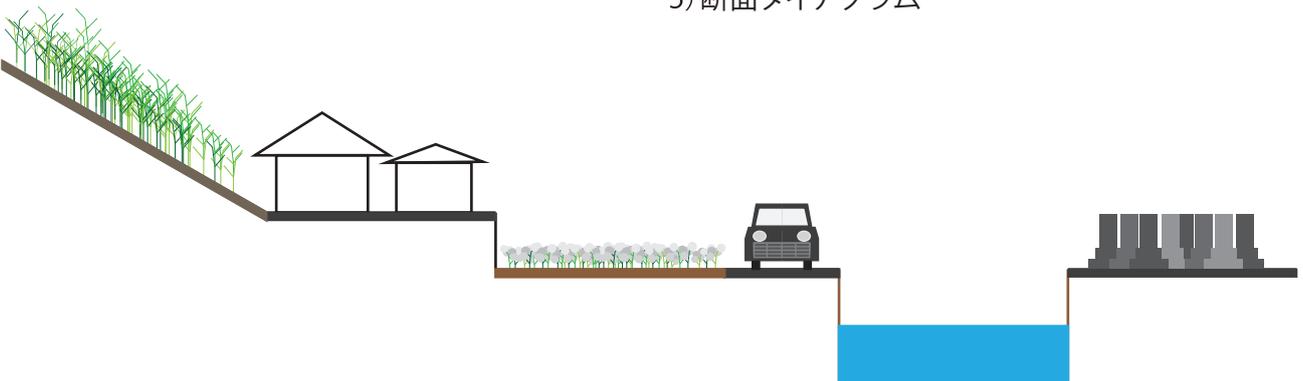


図8 断面ダイアグラム

## 古例大祭について

毎年4月22日(平日・土日祝日関係なく)に開催される、鎌倉時代から続くとされる祭。多賀大社から調宮(ととのみや)神社の間に、神輿や馬が往来する。

## 3) 考察

集落の持続要因として、調宮神社の存在が大きいと考える。毎年4月22日に行われる古例大祭では行列が多賀大社から調宮神社まで渡ってくる。古例大祭は多賀大社の行事の中でも最も重要とされる行事。多賀大社にとって調宮神社の状態保全是もちろん、調宮神社がある栗栖は残る必要があったと考えられる。集落の規模に対して調宮神社の前の橋が荘厳だったことも集落の人のためではなく、祭事を重要視した上での荘厳さであると考えられる。多賀大社の御供所である栗栖は、鎌倉時代から続く祭事が地域を持続させる根幹の要素であったのではないかと推測される。調宮神社の拝殿が多賀大社の御神木の方位を向いていると仮説を立てていたが実際は異なった。(図2参照)

## 4) 集落を象徴する風景と名前

### 「際の集落」

栗栖から先は廃村がほとんどである。最も山に近い集落で今も残っているのが栗栖であるという点から名前を付けた。道路が分かるところにあった看板も人が住み得る際の集落であることを意識させられる。例えばキャンプ場の「たき火研究所」は廃村に作られたものだろう。廃村の存在を認識させつつ、看板を置けるギリギリの集落であることを感じさせる。

## 5) 断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域(奥村加筆)GoogleMapより



図2 1954年地形図と土地条件図(奥村加筆)国土地理院より



図3 1893年地形図と明治期の低湿地(三宅加筆)国土地理院より

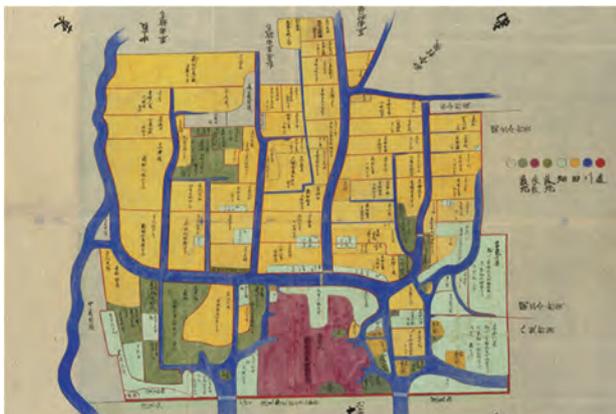


図4 近江国犬上郡百二十八ヶ村之内耕地絵図大藪村(滋賀県立図書館 近江デジタル歴史街道より)

### 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

犬上郡青根郷は現在の彦根市八坂、大藪、長曾根、中藪、松原あたりとされている。

琵琶湖に面して集落が並び、陸側の沼沢地跡は都市化されている。八坂地区は沖合に多景島を有し、内湖跡では丸木船が発掘されており、古くから舟運や漁業が行われてきた地域である(図3)。1622年の彦根城の建設により一部が城下町に組み込まれ、その後は沼沢地の埋め立てによる水田化や宅地化が進んでいる。

### 2) 実見によって得られた客観的情報

地図から集落の規模や構成が特徴的だと判断した八坂、大藪を中心に見て回った。

#### ・環境

琵琶湖と氾濫平野に挟まれた砂州上の微高地に古くからの集落は立地し、周囲は水路や河川に囲まれていた(図4)。大藪の水路には過去に田舟が通っていたそうだが、現在は埋め立てられている。

#### ・建築

両地域で舟板が外壁として用いられており、漁業が盛んな地域であり、木造船の古材が昔から再利用されていたことがわかる。

他の地域と比較して茅葺屋根を見かける機会が少なかった。昔ながらの住宅は瓦屋根のものがほとんどで、密集して建っていた。

寺と蔵は積まれた石の上に、地面から 80-100cm ほど高い場所に建てられていた。石は均等の大きさに切り出されたものが見られた。

#### ・交通

集落内の多くの道路は車が通れないほど道幅が狭い。車両が入れないため、集落内の家屋には駐車場がついておらず、旧道沿いや集落外周部に共同駐車場が見られた。

#### ・集落構造

八坂は1960年ごろ、大藪は1990年代に湖岸道路が通った。八坂の湖岸道路沿いには未利用地が多く見られ、大藪の湖岸道路沿いにはコンテナやアパートが見られた。母屋は水辺から離れた高い場所に立地し、ところどころに菜園があった。



図5 舟板を用いた外壁(三宅撮影)



図6 集落内部にある菜園/自家用畑(三宅撮影)



図7 大数の未利用地ぼっかり空間(三宅撮影)

### 3) 考察

琵琶湖の湖岸線や交通などの環境の変化に適応することで、集落は継続してきたのではないかと考察した。

千年村候補地の各集落は、砂州上に立地する地形的な共通点が見られる。砂州の頂部に旧道が通り、そこから裏手の水域まで短冊状の細長い敷地が続いている。これは、各家から水辺を利用するための地割と考えられる。絵図や旧版地図を見ると、水辺の土地は船着場や葭地、作業小屋となっている(図4)。各集落は琵琶湖や内湖に囲まれた島のような立地を活かし、周囲の水辺から収入を得ていたと考えられる。その後、水域の減少とヨシ原の消滅、漁業や田舟利用の衰退によって土地利用は変化したが、沼沢地の水田化や宅地開発、使わなくなった土地の貸し出し、太陽光パネル等により集落周囲の土地から収入を得る空間構造が継続している。

### 4) 集落を象徴する風景と名前

「ぼっかり村」

スケールの異なる「ぼっかり」した土地をうまく利用した集落である。

集落成立時は琵琶湖にぼっかりと浮かぶ砂州上に立地しており、近代までは水際のぼっかりした土地を琵琶湖や内湖を利用した生業に利用していた。湖岸道路開通後はアパートやレンタル倉庫など建物用地や家庭菜園として利用している。ぼっかり空間の活用方法によって集落内部の母屋で営まれる生活の様子も少しずつ変わってくる様子も印象的だった。

#### 参考文献

- ・角川日本地名大辞典編纂委員会編 1979.『角川日本地名大辞典 25 滋賀県』角川書店.
- ・佐野静代 2003. 琵琶湖岸内湖周辺地域における伝統的環境利用システムとその崩壊.地理学評論.76:19-43.
- ・布野修司 2009. 条里と水利.traverse新建築学研究.10:21-38.

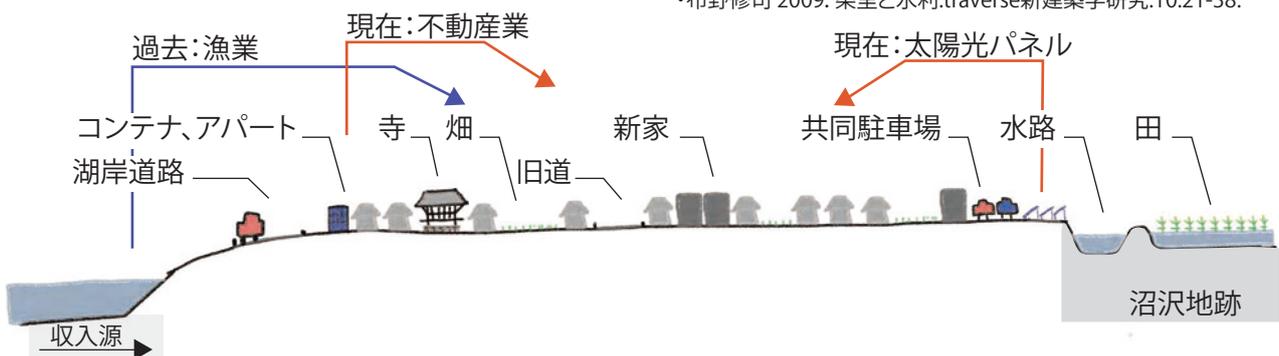


図8 断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域(筆者加筆) Google Mapより

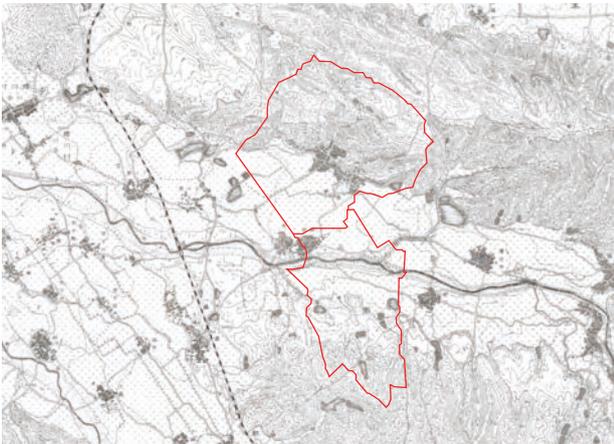


図2 1893年地形図(筆者加筆) 今昔マップより

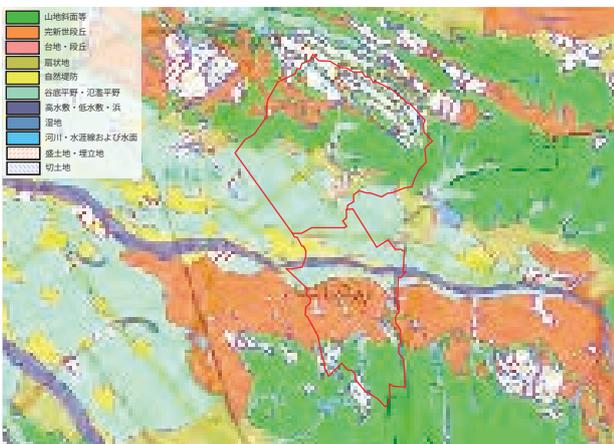


図3 土地条件図(筆者加筆) 国土地理院より



図4 石塔町中にある住宅・防災マップ(松下撮影)

## 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

蒲生郡桜川村は、明治22年～昭和30年の蒲生群の自治体名。琵琶湖の東南で地域南部を佐久良(さくら)川が西流する。川合・木・稲垂(いなたり)・下小房(しもこふさ)・上子房・寺・綺田(かばた)・石塔・平林の9か村が合併して成立。旧村名を継承した9大字を編成。

蒲生郡は近江国・滋賀県の群名。近江国12郡の1つ。日野川の流域に沖積平野が開け、瓶割(かめわり)山・八幡山・安土(あづち)山が連なり、中部から西側に平野部が続く。日野川は野洲部で琵琶湖に注ぐ。(『角川日本地名大辞典』より)

## 2) 実見によって得られた客観的情報

### ・環境

石塔寺の位置する山頂から、雨水は山麓にある下馬溜という池に流れ、そして集落の間の用水路を通り。下馬溜にホテイアオイが生息しているため、農業用水として町で使用されていることがわかる。

### ・共同体

住民の方の話によると生業の形態は半農半商が多く、東京方面に出稼ぎに行く人たちが多かったそう。集落内の家屋は地元の大工さんたちによって作られてきたが現在はそのような職人の数が減っているという。町内会館のような町の共同体が集う場所には集落内の決まり事や生活規律についての張り紙があったり町内に防災マップがあるなど、集落ごとの境界がはっきりとしていて、かつ自治意識の高さが見られた。また、農業用水として使用される下馬溜は防災としての役割もあるようだ。

### ・集落構造

集落を縦断するように断面をとると山頂の石塔寺をはじめ、寺社が断面上に点在し、寺社があるごとに周囲に集落がある。山麓地帯は下溜池と用水路、用水路に沿って家屋と道が構成する集落があり、南は水田が広がる。

### ・社会文化

桜川村に生まれ育った画家の野口謙蔵は東京美術学校(現・東京藝術大学)西洋画科を卒業すると郷里に戻り、終生近江の風景を描き続けた。当時の風潮として多くの画家が欧米を目指す中、謙蔵の姿勢は特筆すべきものと言える。源通寺には彼の描いた絵が保管してある。



図5 石塔寺集落の眺望(松下撮影)



図6 下馬溜 (松下撮影)



図7 石塔寺集落内の広い交差点(松下撮影)

### 3) 考察

下馬溜の元来の役割としては馬から降りる場所だったことから、馬を扱う身分の高さや権威の象徴であり、現代ではため池という農業と防災の機能を持ち、集落の人々の生活にとって切実な拠点である。昔も今もこの土地の重要な歴史が重なり合っている場所であると考えられる。

集落の構造を寺社仏閣の建ち方から分析すると、寺社仏閣の建ち方は①浸透型、②結節点型、③独立型に大分される。①は都市の寺社形態によく見られるような町中に溶け込んだものを指し、中でも比較的平地である集落内の家屋は新旧入り混じったものである。②はこの集落に見られる特徴的な寺社形態で、傾斜地に対して埋め込みや懸け造りのような構法でそのまま建てられており、かつての施工技術では土地を平らに均すことが困難だったと想像できる。周りの同様の施工方法で建てられた家屋は年代も同様古くから残っていると考えられる。そのためかつてはこの結節点型の寺社がある集落を境に、これより上の斜面地には家屋を建てることは難しく、これより下の斜面地には建てることのできるという判断基準のような役割を持っており、傾斜地の集落にとっての防災的意味合いを持っていたと考えられる。③は集落から確立され、離れたところに建てられる寺社形態であり、石塔寺がその例である。集落の家屋は寺社から少し距離をおきつつ②より上の斜面地に建設されていることから、傾斜を平らに均して建てる施工技術が発達した後から発展していった、比較的新しい集落であると考えられる。

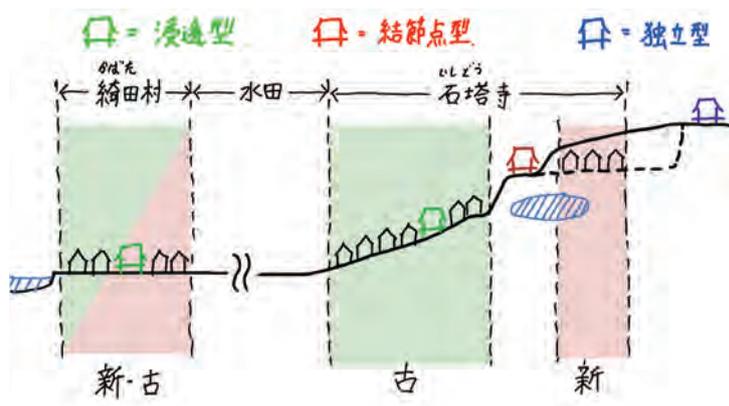


図8 断面ダイアグラム(石田作成)



図1 比定の大字領域(筆者加筆) Google Mapより

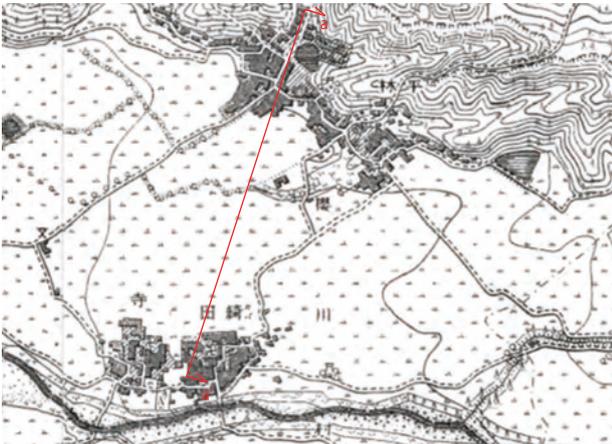


図2 1893年地形図 今昔マップより



図3 土地条件図(筆者加筆) 国土地理院より



図4 石塔寺に集う石塔(姜婷格撮影)

## 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

佐久良川(北西に位置する琵琶湖に流れる日野川の支流)北岸の平原地帯から北へ広がり、標高200メートルの山間地帯までの比定大字である。山頂に古代渡来人の文化を持つ石塔寺があり、その山麓地帯に寺院の名前が付いた石塔寺集落が広がる。

## 2) 実見によって得られた客観的情報

### ・環境

石塔寺の位置する山頂から、雨水は山麓にある下馬溜という池に流れ、そして集落の間の用水路を通り、下馬溜にホテイアオイが生息しているため、農業用水として町で使用されていることがわかる。

### ・交通

山を横断し、南北の平原地帯を結ぶ山道がある。また、住民の話によると、集落の間を東西に走る大通りはかつて「石塔銀座」と呼ばれ、呉服屋や酒屋などのお店が並び、お祭りが行われていた。現在もいくつかのお店がある。

### ・共同体

集落に住む人々の職業は兼業農家が多いそうだ。集落の建築はほとんど木造家屋であり、石塔二区と区画されている地区の住宅はコンクリートのニコイチ住宅となっている。

山頂の石塔寺には8万4千の石塔が集い、昔集められたものだそうだ。宝塔の様式と聖徳太子の伝聞によると、石塔寺は8世紀以前に造られたお寺であるとされている。

\*1)。山麓の集落に近く、標高約160メートルの位置には若宮神社がある。

### ・集落構造

石塔寺と若宮神社は山の高い場所に位置する。集落と反対側の山腹地帯は現在ゴルフコースとして開発された。山麓地帯は下溜池(推測200年前にある\*2)と用水路、用水路に沿って家屋と道があり、南は水田が広がる。

### 〈参考文献〉

- \*1『近江蒲生野』,八日市市郷土文化研究会,1973
- \*2『滋賀県水防計画』昭和59年度,滋賀県河港課,1984.6.



図5 石塔寺集落の眺望(姜婷格撮影)



図6 二種類の住宅間のソーラーパネル(張沛齊撮影)



図7 綺田町のちびっこ「らんど(姜婷格撮影)

### 3) 考察

現地調査にて、集落と田んぼの境目が傾斜になっており、集落が微高地にあることが分かった。集落の中心には寺と家屋がある一方で、集落と田んぼの境目には倉庫、ソーラーパネル、公園が多く見られた。人々の生活において比重が小さい部分ほど集落の境目に近く、ソーラーパネルと公園は、“集落の終わり”を象徴していると考えた。

“集落の終わり”を手がかりに石塔寺集落を見ると、二戸一住宅が立ち並ぶ石塔二区と石塔一区の間に、広範囲にソーラーパネルが設置され、地形に傾斜が見られる。また石塔二区の地形には砂留があり、あとから人工的に高い地形にしたと考えられる。このことから、明治以前は「石塔一区にあたる村」と「現二区よりも東側の平林町にあたる村」だけがあり、明治以降の住居改善によって石塔二区が建設され、他の場所にあった集落がここに移転したと考えられる。

### 4) 集落を象徴する風景

#### 「旧石塔銀座」

石塔寺のある山に沿う集落の大通りは未だにお店があり、かつてのにぎわいを彷彿させると同時に、若宮神社、専修寺、正念寺極楽寺、のお寺に向かう参道が見られる。

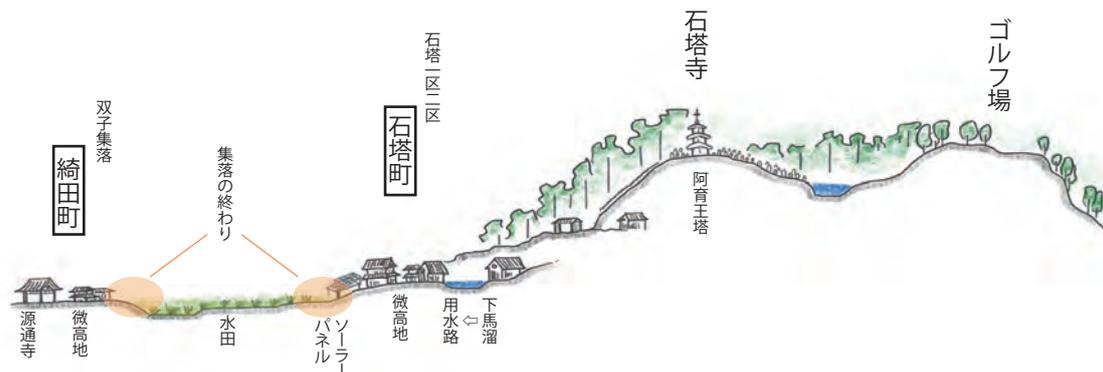


図8 断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域(筆者加筆) GoogleMapより



図2 今昔マップ近江1891-1909より



図3 小野集落・天神社



図4 長寸神社の看板

## 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

明治 27 年~桜谷村が分割し、大字原・川原・杉・杣・小野・奥師・鳥居 平・中之郷・佐久良・奥之池の区域をもって発足し東桜谷村となる。昭和 30 年~ 東桜谷村・西桜谷村・西大路村・鎌掛村・南比都佐村・北比 都佐村と合併し、改めて日野町が発足した。小野は日野町の北東部に位置している。南は石子山の丘陵、北にも丘陵が迫る山間の農業地域。石子山は花崗岩の石材を産した。人魚塚と称する確があり、伝説によって鬼室集斯を祀り、以前は西之宮と呼ばれた鬼室神社がある。鎮守は天神社。寺院はかつて曹洞宗西法寺があったが現在は廃寺。(『角川日本地名大辞典』より)

## 2) 実見によって得られた客観的情報

### ・小野集落

佐久良川沿いに東西に集落が広がっている。最初に小野を訪れた。集落の入り口にある鬼室神社と比較して、天神社は山を背景に参道が通っており、山村の典型的な神社の配置であった。

### ・中野郷の長寸神社

その後、川の下流に向かい、中野郷に行き、長寸神社の看板に、中野郷の上流に位置する「杉杣郷」の存在を知った。

### ・杉杣郷

大屋神社に向かう途中に、「杉」「杣」「川原」という三つの集落を通過した。そして「杉」の住民の方にヒアリングしたところ「杉杣郷」が今も存在する新たな千年村であることを確認した。

### ・佐久良

その後下流の集落「佐久良」を訪れた。そこで住民の方にヒアリングしたところ、現在「佐久良」は下流の「安部居」や「鳥居平」との交流がつながりがあり、同じ佐久良川沿いでも「杉杣郷」と異なる地域共同体があることがわかった。



図5 竜王伝説の看板



図6 杉集落の民家



図7 小野集落の民家に見られたため池

### 3) 考察

事前調査では、出てこなかった「杉杣郷」が千年村であり、旧東桜谷村の上の番に位置していると考えられる。大屋神社で「竜王伝説」の看板を見て、「杉杣郷」が上の番と呼ばれており、「中之郷」が中の番に当たると考えられる。佐久良の住民からのヒアリングによると佐久良は「杉杣郷」や「中之郷」と繋がりは薄く、下の番は今回の調査では明らかになっていない。「杉」の住民からのヒアリングによると「杉杣郷」や「中之郷」が先にでき、後から空いてる奥地の「小野」に人が住み始めたらしい。上の番である「杉杣郷」が水利を獲得する上で最初に上流に住み始めたのではないのだろうか。

### 4) 集落を象徴する風景と名前

山間の川沿いに沿って田園地帯が広がっている。また、小野集落では、住宅の小脇に小さなため池のようなものが見られた。「杉杣郷」にはそのような設備は見られず、小野は杉杣郷より上流であるが、流れが激しく水が得られなかったが故につくられたのかもしれない。

### 5) 断面ダイアグラム

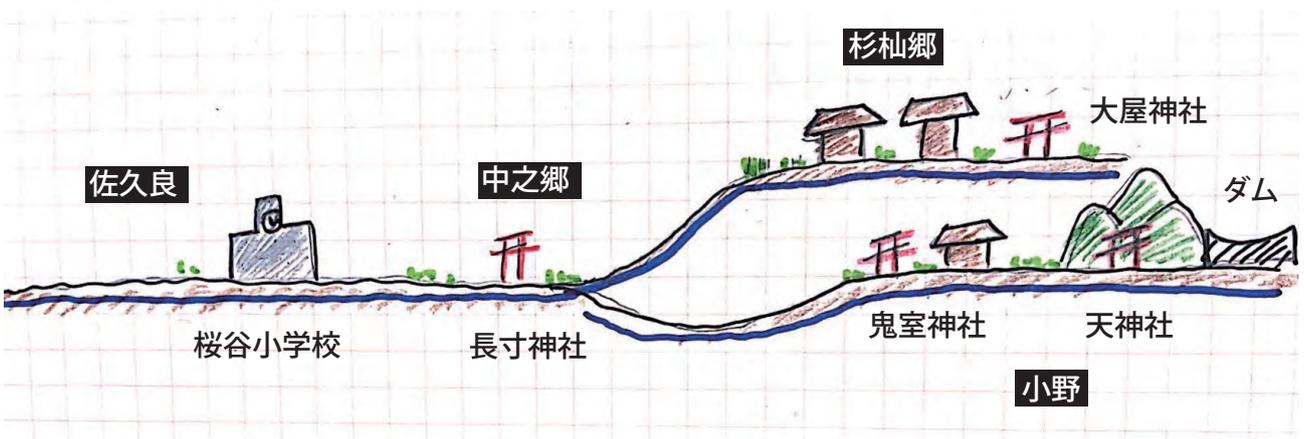


図8 断面ダイアグラム

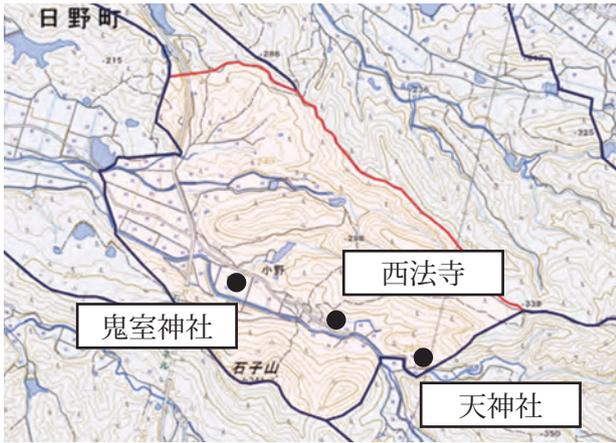


図1 比定の大字領域 (Geoshapeリボトリ, 国勢調査町丁・字等別境界データセットより)



図2 村の北東にある砂防ダム 撮影者:大國



図3 天神社 撮影者:水野



図4 西法寺の看板 撮影者:大國

### 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

日野町が発足したのは昭和30年以降である。明治27年に桜谷村が分割し、大字原・川原・杉・杣・小野・奥師・鳥居平・中之郷・佐久良・奥之池の区域をもって発足し東桜谷村となる。そして昭和30年に、東桜谷村・西桜谷村・西大路村・鎌掛村・南比都佐村・北比都佐村と合併し、改めて日野町が発足<sup>(1)</sup>。

国勢調査によると、小野は現在の日野町の北東部に比定される(図1)。南には石子山の丘陵、北にも日野町から東にある竜王山から連なる丘陵が迫る山間の農業地域が小野である。集落では農業とともに石子山で石切り(黒雲母花崗岩)が行われていた。小野には、二つの天神社と鬼室神社がある。鎮守は天神社とされている<sup>(2)</sup>。

### 2) 実見によって得られた客観的情報

本調査は、小野の西側から入村し、東側斜面上にある天神社から鬼室神社へくだるように行った。

#### ・環境

小野は北と南の丘陵に挟まれており、東から西へ緩やかな斜面を有していた。その山間に居住域と水田が広がっていた。東側斜面上には砂防ダム(図2)もあり、小野の間にある前川に合流していた。前川を挟んで北に居住域、南に水田があった。また、鬼室神社の北側斜面上には小野県営の溜池「湯屋谷溜池」が存在した。

#### ・地域経営

東にある天神社は訪問が可能であった(図3)。しかし、西法寺(廃寺)の西にある天神社は住民に聞き取り調査した際、存在しないとわかった。

村の南側には、鬼室神社(きしつじんじゃ)がある。社名は約1300年前に、百濟(現在の韓国)から渡来した鬼室集斯という高官の墓碑が、神社の本堂裏の石祠に祀られたことに由来する。1990年5月16日に集斯の父をまつる恩山別神堂のある恩山面(大韓民国)と小野は姉妹都市連携の調印を行い、20周年目には集斯亭が整備され、村のシンボルとなっていた<sup>(3)</sup>。

また現在は廃寺となった西法寺は、日野観光協会によると小野の東方にある西明寺との関連がある文化財という(図4)。



図5 北の丘陵から村へ段となっている石垣 撮影者:大国



図6 水路に繋がる家屋の洗い場 撮影者:水野



図7 鬼室神社(真ん中に見えるのは集斯亭) 撮影者:大国



図8 断面ダイアグラム(右図:Geoshapeリポジトリ, 国勢調査町丁・字等別境界データセットより)

### ・交通

村の山間に一本の県道(525号)がある。この県道は、村の西側の東部広域農道に繋がっている。

### ・集落構造

村への入り方は西から伸びる県道のみであった。県道を中心に左右に住宅が建てられていた。東側の住宅地の終わりを少し進むと、山峡地には珍しい、古くから災いをもたらす人魚伝説まつわる人形塚があった。

### 3) 考察

実見から、小野は昔から水害・土砂災害・風害が多い地域であると思われる。人魚塚や、砂防ダム、集落内の石垣(図5)の存在が、主に水害の対策のために設置されたと考えられる。しかし住民の話では、水害より土砂災害や風害の方が多という。

### 4) 集落を象徴する風景と名前

#### 「栄枯盛衰を乗り越なす集落」

小野は、災害の多いというハンディキャップの中、工夫を行うことで乗り越なし、災害が起こるたびに荒廃し再び新しく文化が起こることを繰り返してきた集落であることがわかった。小野は、神社や寺などは複数見られたが建物の再建や廃寺など、古いものが根付いていないように思えた。また小野では、水通りが激しい地域ということを取り、複数の家屋では水路からの洗い場を設けるなど生活道具としての例も確認できた(図6)。

### 5) 断面ダイアグラム(図8)

#### 参考文献

- 1)「角川日本地名大辞典」編纂委員会, 角川日本地名大辞典 25, 角川書店, 1979.4, 899p.
- 2)同上, 326p.
- 3)日野町・日野町国際親善協会 & 日野観光協会(日野まちなか 観光館内), 鬼室神社(パンフレット), 入手場所:鬼室神社, 入手日:2023/10/08



## 千年村候補地における渡来人集落の風景

早稲田大学 中谷礼仁

### 1. 百済人・鬼室集斯が住み着いた場所

天智八年是歳条 是歳。遣小錦中河内直鯨等使於大唐。又以佐平余自信。佐平鬼室集斯等。男女七百餘人遷居 近江國蒲生郡。又大唐遣郭務悰等二千餘人。(日本書紀二八卷)～天智八年、小錦中の河内直鯨(こうちのあたいくじら)らを大唐に遣わした。また佐平余自信(さへいよじしん)、佐平鬼室集斯(さへいきしつしゅうし)ら男女七百余人を近江国蒲生郡に移住させた。(注1)

日本古代に、韓国百済との密接で協力的な関係があったのは、日本書紀の複数箇所でも明瞭に述べられている。天智天皇(626-672)の巻に登場する鬼室集斯は、百済滅亡(660)後に日本に亡命した百済の貴族である。天智四年(665)年に朝廷は、百済の民男女四百人余りを近江國(現滋賀県)の神崎郡に住まわせた。さらに同8(669)年には鬼室集斯も男女七百余の人々と共に近江国蒲生郡(滋賀県蒲生郡)に移住した。鬼室集斯の墓は滋賀県日野町の鬼室神社の境内に据えられている(注2)。同地は今年度の琵琶湖湖東疾走調査の訪問地10の日野町大字小野(この)鬼室神社/滋賀県蒲生郡日野町小野として比定されていた。本稿では特に百済人の国内移住地としての同地域の環境的特徴について既存資料を用いてその基本的性格を比較検討しておきたい。

### 2. 全体的な感想

まず今回の琵琶湖湖東疾走調査の全体的な感想を述べる。同地における訪問地は古墳

時代の古墳から近世の社寺・城郭にいたるまで各種の歴史遺構が登場し、地域の骨格を占めていることが関東に比べて多かった。それらは居住していた地域集団(集落)の重なりとあいまって複雑な歴史層を構成していた。中でも鈴鹿山脈の麓から平地を介して琵琶湖へ至る地形は、同地帯の水利をめぐる多数の環境的、社会集団間の格闘の歴史を想起させた。たとえば訪問地01犬上郡尼子郷/甲良町の各大字では水源地を宗教地として治めることによってその権利を確保した、南北朝時代の大名の佐々木道誉の活動を確認した(参考:「01 犬上郡尼子郷/甲良町大字尼子・在士・北落・池寺・金屋・正楽寺」本書より)。海岸沿い、低地、山の裾野、そして奥深い谷戸と言った環境立地の違いによって、それら水の獲得方法は利権も相まってさまざまな村落の所在や構造を生み出していた。

### 3. 渡来人集落・小野の立地とその環境

さて、冒頭に紹介した百済からの亡命貴族であった鬼室集斯(以降、集斯とする)がすみついた場所として知られるのが小野の地域である。同地域には鬼室集斯の墓石を発端に寺社が建立された場所がある。同地が集斯や百済人の移り住んだ地域の一つであることを前提にその立地環境を検討する。なお同地についてはすでに学生によって本書「10 日野町大字小野鬼室神社/滋賀県蒲生郡日野町小野」として紹介されているので、参照されたい。

小野は、山間の谷戸であり、今回の疾走調査の訪問地でも最も内陸の山間に位置していた。同地には佐久良川の支流である前川が流れており、集落の中心を西明寺安部居線

(県道 525 号線)が通る。谷戸地形であり、その始まりを鬼室神社、その終端を天神社とすればその距離はおおよそ 600m ほどで、幅は最大でも 200m と相当に小規模であった。標高は鬼室神社地点で 220m、奥の天神社で 250m とおおよそ 30m の標高差になる。同地において特徴的であったのは、県道に沿って流れる前川に対する大規模な護岸工事である。谷戸脇のさらなる支流とともに何段も砂防ダムが敷設され、護岸の高さも目測で最大 5m 程の高さがあった(図 1)。よって、この小さな谷戸集落の治水は古代では相当難しかった。現在その谷戸の平地は可能な限り田地として耕作されており、集落は南面する山裾に並列して展開する。山間住居のそれである。前川から分岐させた水道を利用している。豊かな生産量を誇っているわけではないが、小集団が結束して居住してきた様子を想像することが可能だろう。



図 1 小野地区を流れる前川の午前の様子、韓国の集落構造とは異なる。(筆者撮影)



図 2 韓国の集落の代表的立地ダイアグラム(注 3 文献による)

#### 4. 朝鮮における伝統的集落との比較

この、百済民 700 名が居住を許された小野の歴史的特徴を検討するために、そもそも韓国の伝統集落の基本類型との比較を試み程度に行ってみたい。

韓国の伝統的集落の研究は、日本ではほとんどなされていない。そのなかで造園雑誌に掲載された金承煥ほか「韓国・清道地域における農村集落の立地特性とその領域」(注 3)を検討の入り口として紹介する。金はその中で崔在錫による先行研究を基本見解としてあげている。それによれば集落についての既存の分類は以下のとおりである。

- ①地理的位置：平地村・山地村・臨海村
- ②生業機能：農村・林業村・漁村・鉸山村
- ③幾何学的形態：塊村・環村・列状村・碁盤目状村
- ④家屋の分散：集村・散村
- ⑤成立過程：自然型・正規型

そして韓国の集落は同分類によれば平地村 + 塊村 + 集村 + 自然型が大部分であるとしている。山間地の谷戸であった小野を同分類によって述べることは難しい。よもや韓

国においてはそのような環境立地を集落として発展させる機運がなかったのかもしれない。

さらに韓国の集落については、朝鮮総督府が昭和8年に出版した『朝鮮の聚落』前中後編にて当時の17000箇所の集落の中で1685箇所の著名同族部落が把握されている(注4)。同書の見解においては、朝鮮の集落が立地するには、まず生存の基盤である耕作地、水、燃料の問題が同時に解決できるところ、または水害や風害から安全な場所が選ばれる。このような場所は、背に山を抱えながら、水と耕作地が前面にある所、すなわち背山臨流の山と野原が合う所で発見しやすいという(図2)。小野はそのモデルにも当てはまらない。

## 5. まとめ

本稿では小野の環境と韓国の集落立地の概観とを比較しながら、小野が韓国の集落立地とは異なった環境に置かれていることのみを示唆した。これは集斯たちが移住した当時の百済からの亡命民に譲られた土地の特性を象徴している可能性がある。今後は、

千年村研究の東アジアへの展開を意識して、先の『朝鮮の聚落』を入手して、継続的テーマとしてすえてみたい。(了)

謝辞：尼子の佐々木道誉の活動については当日ご同行いただいた公益財団法人元興寺文化財研究所 主任研究員服部 光真から知見を得ました。記して謝意とします。

注1 日本書紀抜粋並びに訳文は以下のサイトによった。古代東ユーラシア来日外国人データベース 鬼室集斯の項 <https://www.senshu-u.ac.jp/eurasia/database-n-kudara-kishitsushuuki.html>, 古代日本まとめ <https://kodainippon.com/2019/08/15/> 日本書紀・日本語訳「第二十七卷% E3%80%80天智天皇」/#google\_vignette

注2 清田善樹による鬼室集斯の項の解説(朝日日本歴史人物事典より)

注3 造園雑誌 53 (5) : p.389-394, 1990

注4 注3に同じ

## 古代郷の比定地と神社の氏子区域：蒲生郡 安吉郷と苗村神社

千葉大学 木下剛

### 1. 古代郷と大字

『角川日本地名大辞典』（1978-1990、角川書店）にみる古代郷（『倭名類聚抄』に記載された郷）の比定地は、以下の7つに分類できる。①単一の大字、②複数の大字、③市域、④河川の流域など複数の市域にまたがる範囲、⑤比定地に関して諸説ある、⑥比定地は未詳、⑦比定地に関する記述がない。これらのうち①と②が、和名抄記載の3986郷の約半数に相当する1977件を占める（千年村プロジェクトHP）。

今回の琵琶湖湖東地域の疾走調査で巡った古代郷比定地は、その殆どが②のケースに分類された。それらのうち、本稿は蒲生郡安吉郷について述べる。蒲生郡安吉郷の比定地は、『角川日本地名大辞典』によると、「現行の蒲生郡竜王町の大部分と近江八幡市倉橋部・上畑・東川を含む地域」とされ、上記分類でいうと、②と③に該当する、非常に広い範囲である。これを地形的に見ると、東を雪野山が、西を鏡山に限る平野を主体とし、雪野山の麓には日野川が、鏡山の麓には祖父川が流れ北部で合流するという、非常にまとまりのある地域となっている。

### 2. 大字綾戸と苗村神社

この地域に存在する大字の多くは、関東と比べての印象であるが、小規模である。この地域の大部分を占める低平地の大字は、自然堤防と氾濫平野から構成され、前者に集落を乗せ、後者を水田として利用している。一方、山際の大字は、低平地のそれと比

べて面積が広い。これは山林を含んでいるからであるが、山林だけで構成されているわけではない。山際の大字といえども必ず平地を含んでおり、自然堤防を更に盛土して集落を形成し、氾濫平野を水田として利用している。このように、個々の大字の地形構成は、他地域で確認されてきたことと大差ないが、特異な土地利用として注目したい大字がある。綾戸である。

この大字の中心部には延喜式内社苗村神社が鎮座する。770m×975mという比較的小規模な大字にあって、苗村神社の占める境内域は広大で、大字の土地利用として極めてユニークである（図1）。この神社の楼門前に馬場があることにも注目したい（写真）。

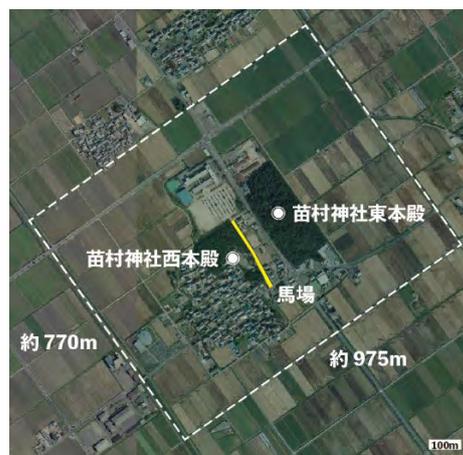


図3 大字綾戸と苗村神社および馬場（黄色の網掛け部分）



図 4 流鏝馬の神事が行われる苗村神社の馬場 (筆者撮影)

この馬場は広いところで幅員10mを超え、全長は220mを超える。この馬場は、苗村神社の節句祭(毎年5月5日に開催)に行われる流鏝馬で使われるもので、これだけの規模の馬場が小さな集落の中で残され、いまなお使われているのはすばらしいことである。

### 3. 苗村神社の氏子区域

さらに驚くべきは、綾戸の苗村神社の氏子区域である。氏子区域は33カ村(九村余郷)におよび、これは現在の蒲生郡竜王町のほぼ全域、東近江市と近江八幡市の一部を含む(図5)。九村余郷の九村は、苗村神社の近傍に集中し、余郷はその外側を取り囲み山林を含むものが多い。

九村は、苗村神社最大の三十三年式年大祭で山車を出す5つの大字を含むことから(表)、苗村神社の宮座を組織する中心的な集落と考えられる。この氏子区域は、上述した、『角川日本地名大辞典』における蒲生郡安吉郷の比定範囲とほぼ重なる。というより、大辞典の比定は、苗村神社の氏子区域に依っているのではないと思われる。有力神社の氏子区域と古代の郷域が重なるというのは十分に考えられることである。古代郷の範囲は思いのほか広く、複数の大字にまたがる傾向は、関東よりも近江国や畿内においてより顕著であるかもしれない。

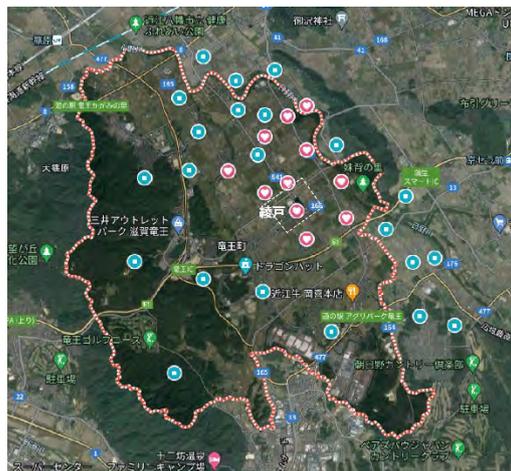


図 5 蒲生郡竜王町域と稲村神社の氏子区域(九村余郷)

表 1 苗村神社の氏子区域を構成する大字(苗村神社のHPより作成)

氏子区域	大字	市町村	
九村(くむら)	神部 鶺川・駕輿丁*の一部	蒲生郡竜王町	
	島村 島	蒲生郡竜王町	
	殿村 川守*・岩井	蒲生郡竜王町	
	子之初内 田中*・綾戸*	蒲生郡竜王町	
	奥村 庄・林・近江八幡市浄土寺	蒲生郡竜王町	
	川上村 川上	蒲生郡竜王町	
	駕輿丁村 駕輿丁*	蒲生郡竜王町	
	余郷(よごう)	橋本 栗師 小口 岡屋 山之上 信濃 戸割 山中 七里 須東 山面 西川	蒲生郡竜王町
		葛巻町 宮井町 外原町 宮川町 蒲生堂町 横山町	東近江市
東川町 上畑町 宮橋部町 新巻町		近江八幡市	

\* 三十三年式年大祭で山車を出す。八幡山(川守)、春日山(田中)、三輪山(綾戸)、慶龍(駕輿丁)、白鷺山(川上)の五基。

## 湖畔の疾走調査

慶応義塾大学 石川初

### 1. 琵琶湖畔の風土

久しぶりの疾走調査はとても充実した楽しい2日間となった。参加人数がこれまでになく多かったが、広範囲の対象地で担当集落を分ける方式が功を奏して、湖東の平野の広域をゆるく理解しながら担当集落をしっかりと歩いて回ることができた。私の車が担当した集落についての詳細な報告は学生チームに譲るとして、今回の疾走調査であらためて感じたことを記しておこうと思う。

たぶん甲良神社のあたりだったように思うが、畑仕事をしておられた老人が地図を片手に集団で歩いていた私たちに声をかけ、何をしているのかと尋ねられた。調査の趣旨とともに、この地域が「人が千年以上住み続けている村だと考えられています」と説明すると、特に感心するでもなく「…まあそうやろな」とおっしゃった。関東圏ではしばしば驚きの反応がある「千年」という時間に対して、この住民の余裕の受け答えは印象的だった。

この老人の余裕、より長く広域的な時空の歴史に現在が「連なっている」といういわば風景の連続感は、近畿地方（京都府宇治市）の郊外の田園地帯出身の私には懐かしいものだった。そうだ、生まれ育った町は、こんなふうに区切りなくだらだらと続いている感じだった。古そうな祠や鳥居がなんとなく家々の間に残っている。古民家のような家と新建材の家が混ざり合っている。全体に、時間的にも空間的にも、現在見えているものがより古い時代、より広

域の環境に「続いている感じ」。そのようなことを考えながら歩き回り、車で移動し、地図を眺めるうちに、この連続感にもいくつかのスケールの階層性があるように思われた。

### 2. 異なるスケールにあらわれる「続いている感じ」

まずは足元のスケールで、土の色が明るいことである。明るい黄土色の土に風化した花崗岩らしい砂利が混ざっていたりして、全体に白っぽい。そのため、畑の土と砂利舗装や未舗装の路地や道路との境目が曖昧で、道や宅地と田畑が続きに見える。畑の土が黒く、農地とそれ以外の地面との境目がはっきり見える関東の風景を見慣れた目にはなかなか新鮮な地面景観である（写真1、写真2）。



写真 1



写真 2

それから、農地や集落のスケールで、条里制由来のグリッドが強く残っているところが多かったことだ。緩い傾斜をなし、水の利のあった湖畔の平野では、約100メートルの正方形の格子状に造成された水田は近代以降の農業においても十分に合理的な形状であり、大規模な圃場整備が不要だったのだろう。多くの条里制遺構に見られるように、地図や空中写真では整然とした区画が描かれていて、自動車で移動しながらの眺めには強い図形を感じるが、車を降りて歩いてみると道や水田の区画は微妙に折れ曲がっていたりして、実空間のスケールでは印象が異なる。この、「揺れるラインで描かれた正方形のグリッド」の複雑さも空間スケールをまたいだ連続感をもたらしているように思えた。

そして、この地域全体の「琵琶湖と連続

している感じ」である。琵琶湖の「前身」は約400万年前に現在の三重県伊賀市付近にできた小さな湖であると言われる。断層運動による地形の変形と土砂の堆積の影響を受けながら形を変えつつ北へ移動し、約40万年前から現在の場所に留まっている。非常に古い時代からの歴史を追うことができる湖である。10万年以上の歴史を持ち、生物の固有種がいる湖は世界に20しかなく、琵琶湖はそのひとつである。むろん日本で最も古い。現生人類が日本列島に到達するよりも昔からある湖である。対象地は琵琶湖の東、鈴鹿山脈から流れる川がつくる扇状地である。所々に火山活動に由来する低い山が点在しているが、それ以外の土地は概ね平坦で、琵琶湖に向かってゆるく傾斜している。(図6)

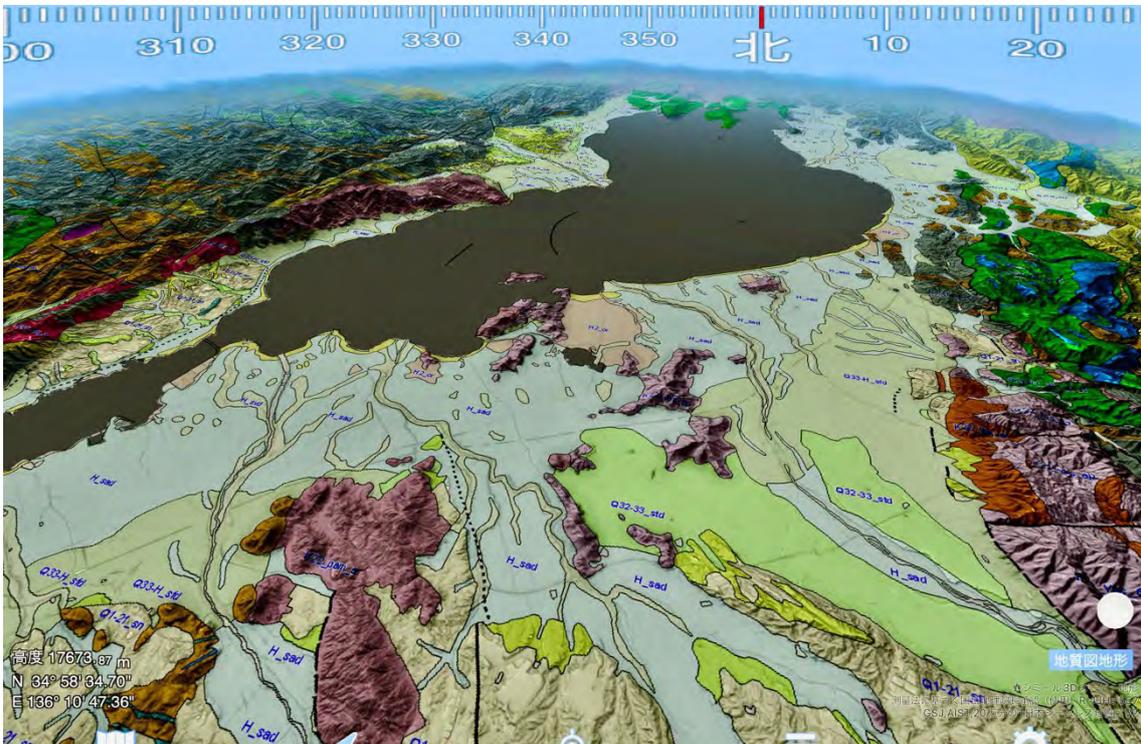


図6 疾走調査対象地域付近の地質図の立体表示

地形図を見れば一目瞭然だが、自動車で移動していても湖への傾斜は何となく意識される。湖面が見えない場所においても琵琶湖の気配がするような感じだ。街と湖の間は車道で分断だれているが、堤防は低く、道を渡れば低い柵の向こうは狭い砂浜の先に湖面が広がっている（写真3）。



写真 3

琵琶湖の大部分は現在でも1年に数ミリ、沈降し続けているという。そこに山から流れる川が土砂を運んでいる。湖畔の土地は山と湖の間でゆっくりと動いている。その上を私たちが猛スピードで行き来しているわけである。

### 3. 研究活動の継承

疾走調査は事前リサーチや野帳の作成、フィールドワーク、即日発表までとても鍛えられた形式が確立しているが、COVID-19の時期を経てあらためて痛感したのは、大学生は数年で全体が入れ替わってしまい、開催が途切れると技術や知識の継承が難しくなってしまうということだった。その点、今回の疾走調査に何人もの卒業生が参加して下さったことは幸いだった。千年村の調査を今後も運動体として維持、発展させてゆくために、若き大人メンバーの充実をはかりたい。

#### 参考文献

- 1) 横山卓雄(1995)『移動する湖、琵琶湖—琵琶湖の生い立ちと未来（自然史の不思議）』京都自然史研究所

## 連続しているように見えるとき

東京都市大学 福島加津也

### 1. 久しぶりの疾走調査

新型コロナウイルスの世界的な蔓延は、私たちの日常生活を大きく制約することになり、その影響は大学の研究や教育にまで及んだ。集落の現地調査を旨とする千年村プロジェクトも、2019年度からリモートでのシンポジウムや以前の調査地の再訪などを行い、活動を縮小しながら何とか継続していた。しかし、この2023年度は久しぶりに疾走調査を再開することになった。調査地は滋賀県琵琶湖の湖東地域、滋賀県立大学の川井先生を新しく大人メンバーに迎え、たくさんの大学の教員と学生が10台以上の車で移動する一大プロジェクトである。当日の朝に関西らしい古墳のある公園に集合した光景は壮観で、これから疾走調査が再開するという気持ちを盛り上げてくれた(写真4)。そして、専門分野の異なる教員と学生が、現地の集落を見学しながら議論をする体験は懐かしくて刺激的で、身体に染み込んでくるように心地よかった。



写真 4



写真 5

### 2. 琵琶湖、渡来人、水際

琵琶湖の東側に広がる湖東地域は、7世紀に朝鮮半島で行われた白村江の戦いの後、百済の高官たちが移住したという渡来人伝説が多く残っているという。川井先生の推薦と事前の打ち合わせによって、10カ所の集落を2日かけて疾走することになった。調査の全体で印象に残っているのは、郊外の国道を車で走っているとすぐに千年村に到着したことである(写真5)。関東で疾走調査を多く経験したので、車で近づくとなんとなくその雰囲気を感じるようになったと過信していたのだろう。しかし、琵琶湖の湖東では現代の街のすぐ隣に千年村があり、直前までまったく気がつかなかった

私たちが乗った車が調査を担当したのは、03の八木郷という集落である。宇曾川の扇状地の中にあり、西武グループ創設者の堤康次郎の出身地だという。かつては中山道や河川を利用した交通の要衝で、現在も名神高速道路や東海道新幹線が通る。水田が広がる低湿地の中に幹線道路が通り、両側にロードサイドショップが続く。千年村はそのすぐ先にあった。優しく密集した小さな集落には、水際の立地を利用し

た水路がていねいに張り巡られ、今も生活に用いられている（写真 6）。地盤面は水田からほんの少し高くなっているだけなので、遠くから見ると民家が稲穂の上に浮かんでいるようだ（写真 7）。このように繊細な微高地を長期間維持するには、高い治水技術が必要だろう。しかし、住人に聞いても昔のことはよく知らないという風だった。それは単に当人の無関心ゆえかもしれないが（笑）、私は集落の持続のシステムが住人の無意識に浸透しているからだと思いたい。



写真 6



写真 7

### 3. 時間は積み重なる

今回の調査の最後に、川井先生が行っている足軽屋敷の改修プロジェクトの現場を見学させてもらった（写真 8）。足軽屋敷は近代に建て替えられてしまうことが多いと聞くが、彦根では広範囲に現存し保存活用の可能性が探られているという。ここでは時間は流れるのではなく積み重なるという空気を感じて、なぜか私も嬉しくなった。調査後は滋賀県立大学に集合して、会議室で各集落の報告会を行った。このような情報共有も久しぶりだ。その日に見学して調査したことを、余計な間髪を入れずに夕方に発表するというテンポのよいプレゼンテーションは、学生の行動力と思考力を鍛えてくれる（写真 9）。その時、湖東の千年村に積み重なった時間が、現代に連続しているように見えた。



写真 8



写真 9

## 聖と俗の二つの中核

東京大学 林憲吾

今回の琵琶湖湖東疾走調査は、関西では初めてとなる本格的な疾走調査となった。まず感じたことは、きわめて主観的にはなるが、やはり関西の千年村は、古代や中世に厚みがあるという点だ。もちろんどの千年村にも各時代の履歴は刻まれている。だが、その場所の環境や社会から生まれる内的な論理以上に、時代のうねりや、より広域の政治や社会状況が反映された集落が多いように感じた。特に今回は、奈良や京都近傍の湖東地域だったこともあろう。高度な土木技術を有した渡来人の存在にしても、ここが古代の政権の勢力圏だったからに他ならない。

さらに言えば、千年村候補地には、時代を経る中で、千年「村」という表現では括ることのできない郷へ、変容していくパターンがあることも強く認識するにいった。中世や近世において、政治的支配や交易の舞台の中心にその郷がなることにより、軍事や行政、商業の拠点として再編・開発され、都市的な、いわば「町」になることがあるからだ。

### 1. 近江の主要舞台・篠筥郷

このようなことを実感したのは、私の同乗した班の担当郷が、蒲生郡篠筥郷だったことが大きい。篠筥郷は、古代の蒲生郡 10 郷の一つとされ、現在の近江八幡市安土町常楽寺に位置する沙沙貴神社を中心とした領域に比定されている。この地区に隣接する下豊浦地区には、16 世紀に織田信長

が安土城を築城した安土山が存在する。また、篠筥郷は、中世に近江国の守護をつとめた佐々木源氏の発祥地である。沙沙貴神社は佐々木源氏ゆかりの地として知られる。安土山の南東にそびえる織山には、15 世紀後半から 16 世紀にかけて、佐々木源氏 4 家のうちの一つである六角氏が居城とした観音寺城が存在した。すなわち、この地域一帯は、鎌倉時代には、近江を治める佐々木源氏の拠点となり、さらにその後、織田信長の拠点になった。その後、近江八幡に中心は移っていくが、篠筥郷は少なくとも中世には近江の主要舞台だったといえよう。

明治 26 年(1893)の地形図を見るなら、沙沙貴神社を含む現在の大字の範囲において、集落の中心は、現在の安土駅北側の常楽寺一帯である(図 7)。自然堤防上に形成されたこの集落は、中世の六角氏の時代には、湊や宿場としての機能を持ち、1930 年頃まで港湾機能を果たしていたとされる水上交通の拠点であった。信長の時代には、この町の東側の安土山の麓に城下町が形成されたため、当地は湊として一層重要度を増したはずである。現在も舟入跡や掘割が残り、住宅の密度も比較的高い(図 8)。したがって、村より町という表現が適している。



図 7 篠笥郡の比定地の明治期の状況(陸地測量部による明治26年測図の2万分の1地形図に筆者加筆)



図 8 常楽寺湊に残る堀割(筆者撮影)

## 2. 繁栄の基盤・西の湖

この場所が湊になった理由は、集落北側の西の湖にある。集落から西の湖に通じる堀割がいまも残る。西の湖は琵琶湖の内湖である。いまは西の湖だけが残るが、かつては琵琶湖最大の内湖である大中湖が隣接し、広大な内湖がこの地区には広がっていた。穏やかで琵琶湖へと通じる水面は水運に適している。しかし、集落にとっては水辺の低地よりも、自然堤防上の方が適している。そのため、集落はやや内陸にでき、その代わり、西の湖との間をつなぐ堀割を

つくることによって、湊の機能を実現させたとみられる。

実際に西の湖を訪れて、西の湖を含む広大な内湖こそが、この地域の繁栄の鍵だった、という意を強くした。現在ではそのほとんどは干拓されてはいるものの、内湖に面した当時の安土山の立地を想像すると、軍事的にも交通的にも有利であろうこの地を信長が居城としたのにも納得させられる。さらに、この内湖が17世紀頃からヨシの生産地として地域の生業を支える基盤であったことも実見で知った(図9)。ヨシの採集・加工を手がける葭留の四代目、竹田勝博氏にお会いしたからだ。この地域のヨシは江戸時代には京などで重宝されており、かつて数十軒のヨシ加工業者がいたが数が減り、竹田氏はヨシ産業の復興のため、新しいヨシの活用にも取り組んでいるというお話を聞いた。また、このような西の湖の利用とは対照的な、戦後の農地拡大のための干拓や近年の住宅地開発にしても、西の湖がこの地域の経済的基盤であることを示している。



図 9 西の湖で採集されたヨシ(筆者撮影)

### 3. 信仰の中核・沙沙貴神社

以上のように、この地域では、西の湖を一つの核にその周辺は繁栄した。しかし、一つの疑問は、この地区を氏子の範囲に含み、六角氏など佐々木源氏ゆかりの地でもある沙沙貴神社が西の湖や町からやや離れた内陸に存在することである。現在の大字の範囲からみても端に位置する。つまり、信仰の中心が、集落の中心から離れている。

しかし、沙沙貴神社を訪問して、その表現よりは、信仰の中心から集落の中心が移った、という表現が適していると思うに至った。宮司によれば、神社の番地は、安土町常楽寺の一番地。そこから湊や西の湖のある北側へと番号が下っていく。この地区の原初は、やはり信仰の中心にあると見るべきなのだろう。

そう思って地図を眺めると、現在の大字の範囲外になるが、沙沙貴神社の脇に「中屋」という小さな集落が目にとまる。調査のときもまさに同じように目にとまり、急いでそこに向かったのだが、痛恨のタイムアップとなり、駆け抜けるだけになってしまった。しかし、それでも何か雰囲気は感じた。だから、というわけでもないが、後に調べると、渡来人の痕跡があった。集落のすぐそばにある竜石山という小山には、5世紀前半の築造とされる「常楽寺山一号墳」をはじめとする古墳群が確認されており、『日本歴史地名体系』によれば、被葬者集団は渡来人と密接な関係があるとされる。古代の集落の中心はこのあたりだったのだろう。

ところで、沙沙貴神社の楼門は、本殿や拝殿とは向きが異なり、竜石山の山頂を向く(図10)。もちろんこれは偶然だが、そ

うしたことも、この地域の原初的な何かとの因果を夢想させる。



図10 沙沙貴神社楼門からみる竜石山(筆者撮影)

### 4. 持続を支える2つの中核

渡来人が来て、佐々木源氏が来て、信長が来る。その過程で、繁栄の中心は琵琶湖側へシフトして、町が生まれた。世俗権力の繁栄には、西の湖が有利だったからであろう。結果的に、信仰の中核から世俗の中核が離れて、2つの中核を持つようになった。しかし、沙沙貴神社の楼門が、西の湖で採集されたヨシ葺きなのが象徴的なように、両者は完全に分離していない。聖と俗の2つの中核が双子のようになって、この千年村を持続させてきたと見るべきなのだろう。

数百年も時が経つと、集落の持続や拡大の要が変わるのは不思議ではない。外から新たな勢力が入ってきたり、集落の規模が村から町へと大きく発展するようなどころでは尚更だろう。そのような郷は、篠筒郷のようなパターンが見られる可能性が高いのではないだろうか。今回の調査地では、尼子郷などもそうした観点から読み解けるのではないかと考えている。近江の主

要舞台となった篠筈郷の、世俗の中核をつくった西の湖に、調査では注意が向きすぎたことへの反省から生まれた気づきである。

## 蚊野郷周辺における依知秦氏の開拓史

滋賀県立大学 川井操

### 1. はじめに

私はこれまで主にアジアの都市や農村をフィールドにしてきたが、コロナ禍に入って渡航できなくなり研究の中断を余儀なくされた。その間、知り合いを通じて以前から関心のあった自然農法のお米づくりや有機農法の野菜づくりに関わるようになった。自宅のある彦根から一時間ほどかけて毎週のように田んぼや畑仕事で湖東地域にある集落（東近江市綺田町、日野町北畑）に通った。その際、道中で目にする変わった地名や寺社に意識が向くようになり、車を停めて何気なしにその界隈を歩くようになった。百姓仕事をしながらその土壌の豊かさを体感し、農家さんから土や水と地形の関わりを教わる中で、かつて蒲生野と呼ばれた湖東平野が歴史的にも土壌的にも優れた場所であることを次第に知ることになった。

中でも東近江市にある石塔寺にはその神秘的な造形と佇まいの魅力に取り憑かれた。渡来人によって築かれた国内最古の三重塔の石塔である。精巧に積み上げられたその高い技術力と優れた造形力に驚いたと同時に近江の地が渡来人と古代から密接であったことを知った。以上の関心の経緯から、ここでは渡来人との関わりの深い千年村「蚊野郷」について考察したい。

### 2. 依知秦の里古墳公園

失踪調査当日には参加者 80 人近くが集まった。各自が米原駅周辺でレンタカー手配して 10 台以上の車が集結する広々とした

場所が必要だったので、集合場所を宇曾川の扇状地右岸にある「依知秦の里古墳公園」を選んだ。現在、この古墳公園に隣接する集落は上蚊野や松尾寺と呼ばれるエリアであり、『和名類聚抄』では蚊野郷にあたる。

愛知郡を中心とした地域では、新羅系の渡来人秦氏の一族である「依知秦氏」の存在が広く知られる。愛知郡愛荘町は 2006 年まで愛知郡秦荘町と呼ばれた。愛知郡は依知、秦荘は秦から来る名称である。ちなみに秦荘の名称は昭和 28 年（1953）に秦川村と八木荘村の合併の際に付けられた名称であり、秦氏の荘園であったことを指すものではないが、古墳公園の背後に聳える秦川山という名称からも古くから秦氏との関連が強かったことが窺える。

この古墳公園は宇曾川の扇状地右岸にあるが、6 世紀後半から 7 世紀中頃にかけての依知秦氏に関連する古墳とされている。現存する古墳は戦後の圃場整備事業や工場建設によってわずかに 8 基ほどしか残されていないが、かつては金剛寺野古墳群と呼ばれ、298 基の古墳群が密集したという。このエリア一帯が、土木技術に秀でた依知秦氏によって灌漑や開墾されて彼らの居住地となった。天智 2 年（663 年）の白村江の戦いで戦死した将軍・朴市秦田来津（えちのはたのたくつ）も蚊野郷出身であった。このことは、依知秦氏がすでに 7 世紀において、朝廷内でも一定の地位を得ており、蚊野郷における権力もこれより早

い段階で得ていたのだろう。



写真 4 千年村疾走調査当日の「依知秦の里古墳公園」の様子(筆者撮影)

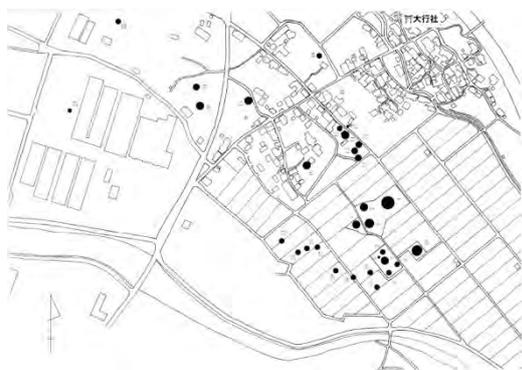


図 11 金剛寺野古墳群の分布(『秦荘の歴史 第一古代・中世』より一部加筆)

### 3. 金剛輪寺と依知秦氏

古墳の背後には秦川山が聳えており、その山中には湖東三山の 1 つ天台宗金剛輪寺がある。金剛輪寺は 8 世紀前半に聖武天皇の勅願により行基が開山し、かつては松野寺と呼ばれた。京都嵐山にある松野大社は秦氏の氏神であり、金剛輪寺は依知秦氏の氏寺であった。そのことを示すものとして、かつて金剛輪寺が所蔵した金銅聖観音像(現ボストン博物館所蔵)にある文永 6 年(1269)の銘文がある。

近江国依知郡之松尾寺本堂安置之、右志者為願主犬上利吉并芳縁依知秦氏子孫

繁盛現世安隠後生善処

とあり、ここでは犬上利吉と依知秦氏が「子孫繁昌」を祈願することが記されている。

上蚊野・松尾寺集落はこの古墳公園の北側に位置する。両集落の南北を貫く中央道は名神高速道路の高架下を抜けて参道へと繋がる。この中央道の北端に祀られる大行社本殿(1447 年建造)は金剛輪寺北側にあった鎮守社の三所権現社本殿を移築したものである。現在の大行社の位置には、金剛輪寺の南門の守護神として祀られた大行社の旧社殿があったが、明治 10 年(1877)に全焼した際にその代わりとして移築された。この中央道はかつて金剛輪寺の南門に接続しており、その参道としても使われたのだろう。

また周囲には廃寺となっているが、塔ノ塚廃寺、妙園寺廃寺、小八木廃寺など金剛輪寺古墳群を囲うように寺院群が配置された。この寺院群周辺からは百済や新羅に見られる湖東式丸瓦が発掘されている。



写真 5 上蚊野にある中央道。正面の秦川山に金剛輪寺がある。(筆者撮影)

#### 4. 条理と古代寺院

律令国家の体制に入り各地に条理を単位として、大規模なグリッド上の整然とした地割が広がった。愛知郡一帯も例外ではなく、大規模条理の展開は8世紀前半に既に展開していたという。弘仁11年(820)には、蚊野郷の戸主依知秦公成人が12条8長田里の3反の墾田を大国郷の戸主依知秦公万歳麻呂に売却した記録が残っている。そのグリッドは東西南北に関係なく琵琶湖の湖岸に対して直行するように引かれる。条理施行以前からあった蚊野郷の金剛輪寺古墳群一帯には条理の痕跡が一切見られず、愛知郡においては蚊野郷より琵琶湖に繋がる平野部一帯に条理が展開する。灌漑土木技術に秀でた依知秦氏はこの大規模工事の担い手になったことが予想される。ただし、単に依知秦氏が個人的に開発したものではなく、あくまで近江全域を対象とした律令制の管理下に依知秦氏が従うかたちで展開されたものである。一方で地域の一部に西南北・正東西の地割を確認できる。まず蚊野集落、岩倉集落の2社の軽野神社も正南北の方位である。蚊野の地名は、カルノがつづまってカノとなり、それが蚊野と呼ばれるようになった説がある。九条家本『延喜式』「神名帳」ではカルノともカノとも訓をふる。軽野神社の西方には白鳳時代に建造された塔ノ塚廃寺がある。昭和53年(1978)の調査では、南門跡やその他の掘立柱建物、寺院の西と南を限ると見られる溝が検出されているが、いずれも正南北の地割である。その他にも、野々目廃寺、小八木廃寺跡地に属する春日神社も正南北の方位である。『秦荘の歴史 第一巻古代・中世』による

と、「この寺院(塔ノ塚廃寺)について、は依知秦氏一族の依知秦公氏による創建で、当初はすでに勢力の安定を保っていた依知秦公氏の伝統と権威が保持されていたが、律令政府と地方豪族層との葛藤の末、8世紀中葉になると律令政府の権力が地方豪族を大きく凌駕して彼らを押しさえ込むに至った、と想定している。」とある。したがって、重要な寺社については、条理制の施行以前には、正南北のラインを基軸にして建造されたといえる。

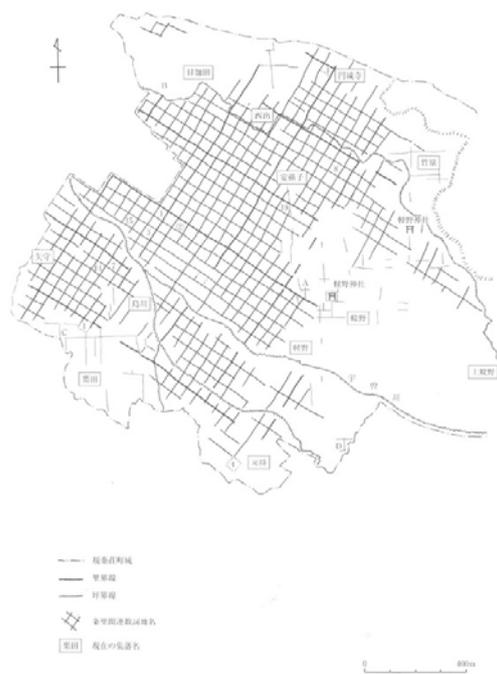


図 12 旧秦荘街域の条理復元図(『秦荘の歴史 第一巻古代・中世』より引用)

## 5. 灌漑用水路「愛知井」

その他にも正南北に地割を展開する地域があり、その中に愛知井と呼ばれた灌漑するための用水路がある。近江盆地では、灌漑用水を得にくい段丘上に上流より水を引いてくる用水路が数多く存在し、これら用水路は一般に井（ゆ）と呼ばれる。愛知川左岸でも、高麗井や高井などの存在が知られ、その起源は少なくとも中世以前にまで遡ると見られる。

この愛知井とその周辺に統一条理とは異なる地割が存在することが注目され、愛知井の灌漑域を現地調査によって復元され、それが元興寺・東大寺の寺領の分布域、すなわち愛知荘とほぼ重なることも確認された。したがって愛知井の掘削は遅くとも8世紀までには完了したと考えられ、条理の施行以前のものということになる。

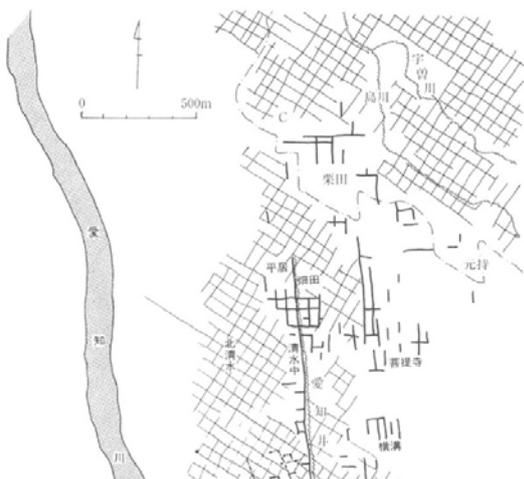


図 13 愛知井とその周辺の地割(高橋誠一・小林健太郎「愛知川扇状地北半部の開発と条里」『滋賀大学教育学部紀要—人文・社会科学—』27より)

## 6. まとめ

最後に蚊野郷を中心にして、依知秦氏の開発史を簡単に追ってみたい。

1. 6世紀中頃以前から秦川山麓にある宇曾川扇状地の開拓と灌漑整備、古墳群を形成した。
2. 白鳳期（7世紀中頃～8世紀初め）において、蚊野郷を囲うように依知秦氏を中心にして寺社が建立され、その多くは正南北の地割を採用した。蚊野郷にある2社の軽野神社には、その南北軸が顕著に残っている。さらに領域を広げると、愛知井に見られるような灌漑用水路においても南北軸が採用された。
3. 律令国家体制下において愛知郡一帯で大規模な条理が施行され、灌漑土木技術に秀でた依知秦氏はそれに従うかたちで担った。

### 補注・引用文献

- 1) 大橋信弥、花田勝広『ヤマト王権と渡来人』サンライズ出版、2005
- 2) 胡口靖夫『近江朝と渡来人～百濟鬼室氏を中心として～』雄山閣出版、1996
- 3) 鈴鹿歴史文化研究会『鈴鹿山地とその周辺地域 歴史文化学術調査報告書』滋賀県・三重県、1966年
- 4) 高橋誠一・小林健太郎「愛知川扇状地北半部の開発と条里」『滋賀大学教育学部紀要—人文・社会科学—』27より
- 5) 野崎進之介『石工が見た古代蒲生野と石塔阿育王塔』サンライズ出版、2004
- 6) 橋本道範『日本中世の環境と村落』思

文閣出版、2015

- 7) 秦荘町史編集委員会『秦荘の歴史 第一巻 古代・中世』秦荘町、2005年
- 8) 用田政治『琵琶湖博物館ブックレット 13 琵琶湖と古墳～東アジアと日本列島から見る～』サンライズ出版、2021

## 小さな発見たち -琵琶湖湖東千年村候補地の集落構造-

田熊隆樹

### 1. はじめに

千年村プロジェクト独自の調査方法である疾走調査は、1日や2日という短期間で多くの集落を一度に見て廻ることに特徴がある。今回の琵琶湖湖東疾走調査の対象は10集落と比較的少なかったものの、距離が離れている場所もあり、集落の実見時間は過去の疾走調査と同じく限られたものとなった。

そんな疾走調査で最も大切なものは「直感」であると思う。直感というか、その集落に降り立った時に感じる雰囲気あるいは違和感のような「小さな発見」が、実は集落の歴史的特徴とつながっていることが後々わかる、なんてことはしばしばある。

疾走調査は報告書も簡潔だ。2ページでひとつの集落全体の位置付けや分析をまとめるため、字数や写真の制限によって、現時点では価値があるのかわからない「小さな発見」は記録から洩れてしまうかもしれない。そこで今回はプロジェクトメンバーの一人として、調査集落全体を通しての「小さな発見」、とくに千年村の重要な要素のひとつである「集落構造」に関するものを中心に、パタン・ランゲージ

のように記録しておこうと思う。まだ調理しきれていない生の情報を、そのまま記録しておくことで、今後詳細調査が行われる場合のきっかけにもなるかもしれない。

### 2. 「飛び出る地棟カバー」

今回の集落全体に共通して、伝統工法の家は2階建の切妻屋根瓦葺が多かった。その2階妻面上部には目玉や鳥小屋のような小さなものが飛び出ている。これは「地棟」という、棟と並行な材が外へ20cm程度飛び出したもので、保護のため金属板や木板でカバーされているものだ。地棟の日本全国における分布は現時点で資料に乏しく明らかでないが、とくに湖東地域の古い民家には必須の存在であるように見受けられた。地棟が構造的に重要な意味を持つことを考えると、それはこのあたりが積雪する地域であることと関係がありそうだ。

また今回の調査の中で、近年建てたと見える非伝統工法の家(こちらも切妻)の妻面にも「地棟カバーの名残」らしきものを見た。それは夜になると光る照明のようにも見えた。構造としての地棟が使われなくなっても、ある種呪いのように残ってしまうこのデザインの中に、集落が引き継いできた湖東地域の民家のイメージがあることは間違いなさそうだ。



図 14 水という字が書いてある地棟カバ

一

(10 日野町大字小野)



図 15 鳥小屋のような地棟カバ

(08 犬上郡青根郷)



図 16 名残と思われるもの

(01 犬上郡尼子郷)

### 3. 「集落、更新中」

いままで見てきた多くの千年村に共通する特徴として、いまでも新しい民家が建てられ続けていることがある。湖東も例外でなかった。その多くは住宅メーカーの建てたものだと見えるが、特に敷地が大きい農家の家では同一敷地内で古い家と共存していたり、家族が多世代に渡って住んでいることを想像させる。またその敷地内で新しい家はほぼ必ず前面に建てられている。古い家は奥に鎮座しているのが常である。

とくに<02 愛知郡蚊野郷>の上蚊野では、母屋が敷地の奥に、道に対

して平行に平入りの切妻を構え、その左手前に作業小屋が垂直に向きを変えて立つ集落構造が見られた。新しい家はこの小屋の位置に建て替えられるなど、ある一定のルールのもと更新されているようだった。

また集落内の多くの道が幅 2m ほどと車の通れない<08 犬上郡青根郷>では、わずかにある幅広の道沿いに新しい民家が多く見られた(駐車ができる土地だから売れるのかもしれない)。このように集落の更新ができる余地、「スキマ」があることは、湖東千年村においても必須条件と言えるだろう。



図 17 新しい家が建つときは、ほぼ必ず

前面に建つ (02 愛知郡蚊野郷)



図 18 奥に鎮座する古い家

(10 日野町大字小野)



図 19 道幅の広い道路沿いには新しい

家が集まる (08 犬上郡青根郷)

#### 4. 「いきなり玄関」

集落を歩いていて違和感を感じたのが、民家の玄関の位置である。多くの家が、道からすぐ見える正面に玄関を構えていた。また、塀がないことも多かった。このような道との関係は安心感に乏しく見えるが、

これは集落の構成要因に親族が多いためオープンになっているなど、共同体の性質に起因する可能性もあるのではないだろうか。また同乗の学生からは「洗濯物もオープンに干している」といった発見も報告され、この地域の方々のオープンさの表れは様々なスケールで展開していそうである。



図 20 道を歩いているときいきなり現れる玄関 図 21 わざわざブロック塀を終わりにして 図 22 新しい家にもいきなり玄関  
 関(01 犬上郡尼子郷) 玄関をむき出しにしている (09 蒲生郡桜川村)  
 (08 犬上郡青根郷)

#### 5. 「石で守る」

今まで見てきた多くの千年村がそうであったように、集落の中で重要な神社や寺、蔵などは一段高く盛り上げられ、水害から守られていた。その土台は石垣で築かれることが多いが、ここではその石垣がとても印象に残った。特に神社や寺に見られた、丸石(川の流れて削られたもの)を、最初から相互に組み合わせられていたかのようにピッタリと積んでいる「ムチムチ」とした様は圧巻であった。その石は、湖東一帯に広がる「湖東流紋岩」(流紋岩、流紋岩質の溶結凝灰岩、花崗斑岩などをまとめてこの地域でこう呼ぶ)であるようだ。彦根城や安土城の石垣にも使われたこの上質な岩石の豊富な存在は、湖東の千年村を持続させてきた重要な環境資源といえそうだ。



図 23 ムチムチと、石と石にスキマがほとんどない。(01 犬上郡尼子郷) 図 24 神社など重要施設は1m以上嵩上げされる(01 犬上郡尼子郷 金山神社) 図 25 年代によって積み方も違いそうだと(02 愛知郡蚊野郷)

## 6. 「さわれる水」

湖東の集落は全体的に山から琵琶湖方面へ傾斜していることから、集落の中に水路が見られる。その水路は開渠で、道路脇を流れる水を目視できる。各家の手前にはこの開渠から水を引いた「洗い場」が設けられているところが多く、ここで長靴や農具などを洗うのにつかっているようだ。彼らの水場の作り方はしっかり計画されており、水路から入った水がきちんと水路に戻るようになっている。

また道に沿ってカーブする水路を利用して幅を拡げたり、ここぞという場所で作っている様子が窺われる。〈01 犬上郡尼子郷〉では集落内に幅広のオープンな水路が走っており、子どもたちの遊び場＝公園としても機能しているようだった。これら「さわれる水」は、自分たちの暮らす場所の方向や資源の量・質を把握するための存在となっているのだろう。



図 26 長靴を洗っていることが一目でわかる

(10 日野町大字小野)



図 27 水路の曲がる部分を利用して幅を拡げた洗い場 水を待つ植木も見える

(10 日野町大字小野)



図 28 オープンで幅広の水路は子どもたちの遊び場にもなる

(01 犬上郡尼子郷)

## 千年村パターンランゲージの活用による新たな千年村「松杣郷」発見の経緯

金盛晋也

### 1. はじめに

琵琶湖湖東疾走調査では当初 10 箇所の千年村候補地を対象に調査が計画されたが、現地での疾走調査の結果、新たに「11. 松杣郷」を確認したことから、本報告書においては松杣郷を含む 11 郷の調査結果が取りまとめられている。本稿では、この松杣郷発見の経緯を記すとともに、これまで整理してきた千年村のパターンランゲージの有用性について述べたいと思う。

### 2. 調査の目星の検討

#### 2-1. 郷フレームへの違和感

疾走調査は文字通り、複数の市域にまたがる広範をわずか 2 日程度で見るという特性上、車両で疾走する点を考慮しても時間的な制約が厳しい。(ただし、限られた時間の中で最大限集落の特徴を見出すこの手法はフィールドワークの訓練や詳細調査の対象地の選定方法としては非常に有意と考えている。)したがって、事前に面白そうな箇所に目星をつける工程が重要である。学生時代に、野帳と調査後の報告書の作成を割り当てられていた私はこれを意識していたことから、詳細な目星は各野帳作成者が行うにせよ、目星をつける範囲のベースとなる「郷フレーム」(千年村の比定範囲の図枠)の作成は慎重に行っていた。

今回私のグループが割り当てられた「日野町大字小野(以下、小野という。)」の郷フレームを確認したときに、直観的に範囲

が小さいと感じた。過去にも単独の大字が千年村に比定されていた事例はあったにせよ、それらと比較しても野帳に示された当該比定範囲だけでは「なにか」が足りなかった。

この違和感を確認すべく、小野周辺を俯瞰したところ、関東で頻出していた谷戸状の地形となっており、小野はその谷戸の一部分を構成する集落であった。(図 1) 関東の千年村の例では、谷戸を縦断する河道の流域内の集落群を基本単位とし、複数のそれがまとまり、1 つの郷を形成していたことから、ここもそうした構成ではないかと仮説を立て、郷フレームの再検討を行った。

#### 2-2. 郷フレームの再検討

小野は千年以上前から渡来人が移り住んできたことをほのめかす鬼室神社の存在ゆえに今回の疾走調査対象地として選定されたという経緯もあり、明確に千年村の比定範囲を示す資料はなかった。したがって、郷フレームの検討にあたっては、ひとまず町村制の施行時の行政単位を確認した。これを見ると、小野は 1889 年(明治 22 年)に設置された桜谷村に属していたものの、1894 年(明治 27 年)には、桜谷村は東桜谷村と西桜谷村に分割されていたことが確認できた。(表 2) 一つの行政単位であったものを再分割するという行為は、現代の市町村合併・分割の行政手続きの難しさに比べれば幾分簡単ではなかったかと思われるものの、やはり相応の労力を伴うことは想像に難しくなく、それでもなお行政単位を分割したという事実を見る限り、一つのまとまった共同体としてのアイデンティティが相当強そうだと感じ

た。こうした経緯から、郷フレームを小野が属していた旧東桜谷村と設定し、当該範囲を調査対象地として疾走してはどうかということを学生メンバーに打診した。  
 (なお、調査対象範囲の共有のため、グループメンバーには旧東桜谷村の範囲を示す.kml データを配布した。)

表 2 旧桜谷村の行政単位の変遷

大字名	安部居	中在寺	北脇	蓮花寺	野出	原	川原	杉	杣	小野	奥師	鳥居平	中之郷	佐久良	奥之池
1889年	桜谷村														
1894年	西桜谷村					東桜谷村 (今回設定した郷フレーム)									
1955年-	日野町の一部														

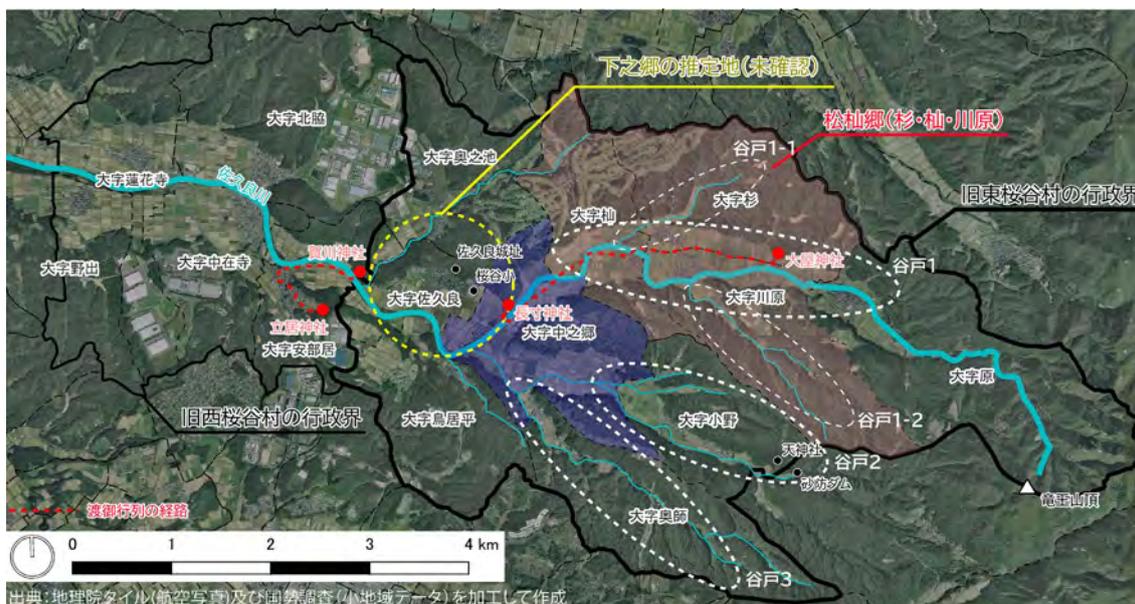


図 29 調査で獲得した情報

### 3. 調査の経緯と考察

#### 3-1. 小野

とはいえ、大学からしばらく離れた一介の社会人でしかない自分の立場上、学生の皆さんに作成いただいた野帳を顧みないという行為は学生にも示しがつかないことから、小野を歩いてみることにした。

小野は谷戸の上流部に位置する谷戸状集落で、各住戸には共通して川からの水を貯水する枡があり、手入れの状況から判断するに、現在でも生活用水として利用されていると推察された。こうした状況から水利が集落の重要要素と考え最奥の砂防ダムまで藪漕ぎする過程で、河川護岸の大規模な改修や、危険木の除却等を目的とした斜面林の整備など、県の防災事業が集落全体にわたり実施されていることを確認した。また水田だった農地がWCSと呼ばれる乳牛や肉用牛の飼料に転作され、それが地元の農業法人により栽培されていることを確認するなど、当該集落が防災・生産の観点で単独で持続的かという点には疑問が持たれた。私の力量ではこれが限界だったこともあり、小野での調査は引き上げ、下流の集落に降りてみることにした。

#### 3-2. 中之郷

中之郷は、小野の下流に位置し、隣接する複数の谷戸からの河道が合流する地域である。今も公民館があるなど、本地域の中心地であることが推察される。疾走調査での情報獲得には神社に行くことがセオリーであるため、長寸神社に赴いた。式内社であることに加え、近隣の大屋神社と毎年春に渡御行列（曳山とそれを担ぐ人々）が往還しているということが確認できた。

これを踏まえ、次に大屋神社に行くこととした。

#### 3-3. 新しい千年村「杉杣郷」の発見

大屋神社への道中、水田に囲まれた美しい集落群を確認した。直観的にここは千年村ではないかと考え、立ち寄ることとした。確認した集落は大字「杉」「杣」「川原」の3つの大字からなる集落群であり、プリミティブな名称であることも相まって、かなり千年村っぽさがあった。疾走調査では案内板等の確認による情報収集にも限界があることから、住民へのヒアリングも重要である。同グループの学生にもヒアリングを体験してほしいという思いから、上記3大字のうち、表で作業している住民を複数見かけた「杉」に降り立つこととした。

杉では自家用畑にて作業を行っている男性に対し、ヒアリングを行った。突然来た若者たちに嫌悪感を特に示さないのも千年村っぽさがあった。近年、周辺の民家をホテルとして経営すべく中東からの来訪者が多いそうで、これも外部の人間に対する寛容さの要因かもしれないが、いずれにせよ過去の千年村の住民と同じように対応いただけた。周辺の古い集落を探すための調査をしているという趣旨を伝え、ヒアリングする中で、「この辺りは杉杣郷といわれていて…」と聞いた瞬間、全員が「杉杣郷!？」と復唱した。これが新しい千年村発見の瞬間である。話を聞くに、「杉」「杣」「川原」の3大字で杉杣郷なる共同体が形成されていたらしく、これら集落は小野に人が住み着く以前からあったのではないかとのことであった。杉杣郷と小野の成立年代の前後についての詳細は明らか

かではないものの、地形条件を考慮すると、まとまった生産地を確保できる杉柵郷の方が成立が早かったという話はあながち誤りではないと考えられる。

地元住民から聞き取った内容は重要ではあるが、その真偽を確かめることもまた重要である。ここからは本当に杉柵郷が存在するかの確認を行うこととした。目的地であった大屋神社もまた式内社であり、案内板に杉柵郷の記述があった。それを見るに佐久良川沿いの3つの郷は共同で雨乞を行っており、郷ごとに踊り等を奉納していた。上之番と中之番がそれぞれ杉柵郷と中之郷に当たることは推察できたが、下之番に該当する集落は確認できていなかったことから、今度は下之番（以下、下之郷という。）を探すこととした。

### 3-4. 下之郷(未確認)

その名称から、中之郷よりも佐久良川の下流にあると推定し、大字佐久良の佐久良古城址を訪れたが、松柵郷等との関連性は確認できなかった。また、旧西桜谷村の大字安部井の賀川神社も訪れたが、賀川神社の氏子は佐久良、奥之池、鳥居平、安部井であり、毎年春の渡御行列においては安部井にある立居神社間を渡御行列が往還するという記述があったことから、長寸神社—大屋神社との関係性は確認できず、下之郷を発見することは叶わなかった。ただし、調査当日は佐久良の桜谷小学校にて東桜谷地区の運動会が開催され、旧東桜谷村を構成する大

字のみが参加していたなど、現在でも続く一つの共同体としての輪郭が見て取れ、関東と同様に湖東の千年村においても谷戸を基本単位とした共同体が形成されていると推察される。

### 4. おわりに

「千年村っぽい」という感覚から杉柵郷の発見に至ったわけだが、今回の疾走調査では、これまで蓄積してきた千年村のパタンランゲージ(図 2)の整理が非常に有効な作業だったということを体現できたのではないかと思う。今後も千年村のパタンランゲージをアップデートすることで、文献に依らずとも現地で直観的に千年村を見つけられる他、集落構造をより精緻に把握できると考えられる。冒頭でも申し上げたが、この疾走調査のパッケージは集落調査の手法としては非常に有効な訓練方法であることは疑いようのないことである。疾走調査も千年村と同様に持続的に営まれていくことを期待したい。



谷戸の使い方(易し)

谷戸の使い方をみる。これは水田として利用されている。水が流れる谷戸の王道の使い方。



生産地の転用

生産地が新興住宅地に転用される。こういうときは土壌が悪い(生産性の低い)土地が転用されることが多い。使えない土地から手放すのだ。

図 19 千年村パタンランゲージ(抜粋)

## 驚きかたの「インストール」：蒲生郡桜川村を例に

近藤真

### 1. 疾走調査の再開にあたって

今年度の疾走調査は、3年間の中断、50名近い大所帯、関東が拠点の参加者が多い中での湖東地域が対象と、準備が大変だったことは想像に難くないのだが、特に学生のみなさんのおかげで無事実施することができたと思う。こうして報告書を書いているいま、学生のみなさんの頑張りに改めて感謝している。

疾走調査の再開にあたり、当時の疾走調査運営を知るOBとして、野帳を作る会など微力ながらお手伝いをさせてもらった。野帳を作る会では、野帳作成作業を完了させることを第一の目的とし、肝心な疾走調査の視点は「くさそうな」要素と呼び、ある種のTips的な説明に留めた。しかし、千年村の調査自体の初参加者が多いことをふまえると、やはり疾走調査の視点の全体像を示すべきだったと思う。その反省もふまえ、本稿では、疾走調査にフォーカスした情報収集の視点の全体像の整理を試みたい。大人メンバーはご存じの内容ではあるが、今後の疾走調査の一助になれば幸いである。

### 2. 疾走調査の「情報収集」の視点

千年村の集落の特性把握の視点を示した資料のひとつに「[千年村チェックリスト](#)」がある。本来は千年村プロジェクト外の方が千年村認証に向けた基礎資料として記入するものであるが、言い換えると、千年村プロジェクトが重視している集落の情

報収集の視点を、初心者にもわかるようにシンプルに整理したものである。このチェックリストをもとに、疾走調査の「情報収集」の視点の整理を試みた。

疾走調査のウリのひとつは、調査当日やその後の会議における報告会などを通じて、プロジェクト全体でその集落の理解を深めていくことであると考えている。そのためにも、考察の材料となるファクトの収集にはベストを尽くしたい。情報収集であれば、調査の練度に関わらず、時間をかければ実施できることであるし、情報収集を通じて新たな仮説が降ってくる場合が多いことが理由である。

洗練された野帳作成のみでは、理解することが難しい調査の情報収集の全体像を理解することに活用できればと思う。以下の考え方で、「千年村チェックリスト Ver.2.3」をアレンジし、「[疾走調査の情報収集の視点リスト\\_Draft](#)」とした。

- 千年村チェックリストの項目に対して、疾走調査における情報源(下線部)を追記し、疾走調査の情報収集の視点とした。
- 千年村チェックリストでは同じ項目であっても、疾走調査における情報源が異なる場合は別の項目とした。
- 視点ごとに、情報収集のタイミングと優先度を記載した。情報収集のタイミングは、「野帳作成時」「集落实見時」「住民ヒアリング時」に区分した。
- 優先度は、「★：確認必須」「☆：該当すれば確認必須」「○：可能な範囲で確認」の3段階で整理した。

時間・経験ともに制約がある疾走調査において、着目されることが多く、比較的短時間で把握できる可能性が高い要素の優先度を高く設定した。なお、優先度と重要度は関係しない。

- 住民ヒアリングは、できない場合も多く、住民ヒアリングができるまでひとつの集落で粘ることは疾走調査の目的にそぐわないため、優先度を「○:可能な範囲で確認」とした。もちろん住民に話を聞けるに越したことはない。

千寿村アンケートリストの視点	株主調査の情報収集の視点		情報収集のタイミングと優先度		満生郡樺川村における情報収集-考察例 ※考察は文頭に〔考察〕と記載
	野帳作成時	集落実見時	住民ヒアリング時		
I 環境 - 自然とのつきあい 集落のかたち・立地 古いところ					
1	迅速測図や衛星地図などで確認できる集落は、土地条件図などでどのような地形に立地しているか。集落実見では、事前に把握した特徴の確認を確実に、土地条件図では把握できない微細地形があるか。 迅速測図や衛星地図などから、街道やみなの影響がありそうか。	★ 確認必須	★ 確認必須	-	土地条件図より、石塔寺の住居は扇状地と段丘上、綿田村の集落は自然堤防上に立地している。
	迅速測図や衛星地図などから、現状の河川などの水辺や旧河道の影響がありそうか。	★ 確認必須	★ 該当しそうな現地確認必須	-	1893年地形図や標準地図より、旧街道からは距離がある。
生産地(農地や工場などの)立地	迅速測図や衛星地図の農地や林地は、土地条件図などでどのような地形に立地しているか。 航空写真、土地条件図などから、現況の河川などの水辺や旧河道の影響がありそうか。	★ 確認必須	★ 確認必須	-	綿田村は佐久良川に隣接する可能性がありそう。旧河道はなし。
2	迅速測図や衛星地図、航空写真、土地条件図などから、漁業地や工場、商業地はどのように立地しているか。耕作放棄地や空地はどこにあるか。旧河道はどのように利用されているか。(旧河道があれば)	★ 確認必須	★ 確認必須	-	石塔寺・綿田村とも、土地条件図より、低地は水田として利用されている。集落実見より、集落周辺に小規模な畑地がある。
主要産業・特産物	自治体や個人のWebサイト、集落実見、住民ヒアリングなどから、現在の主要産業やかつての主要産業はなにか。特産物はなにか。	○ 見当を付けられるとよい	○ 可能な範囲で確認	○ 可能な範囲で確認	目立つた土地利用は確認できなかった。
3	住民ヒアリングなどから、住民の働き先はどこか。	-	-	○ 可能な範囲で確認	確認できず
水源と水の引き方	集落実見や住民ヒアリングなどから、農業用水の水源は何か。生活用水の水源は何か。井戸が残っているか。地域内の水回りを確認しているか。	-	-	○ 可能な範囲で確認	確認できず
4	近年の土地開発について	★ 確認必須	★ 確認必須	-	集落実見より、石塔寺には「石塔一区」農地・水・環境委員会が管理する「下馬淵」というため池があり、おそらく農業用水として利用されている。綿田村は確認できず。
5	過去の災害とその対策	★ 確認必須	★ 確認必須	-	東江市都市マスタープランより、特に目立った開発は確認できず。 航空写真と集落実見より、石塔寺の山林の一部がゴルフ場、石塔寺と綿田村の境界付近を中心に農地の一部が小規模なソーラー発電所に開発されていた。
6	地域経営 - 集落を支える仕組み 各種組織	★ 確認必須	○ 可能な範囲で確認	-	東江市防災マップより、石塔寺の住居の一部が土砂災害警戒区域に、綿田村の集落の一部が緊急危険区域に指定されている。集落実見では、石塔寺で急傾斜地崩落危険区域の看板があった。
1	地域内の情報伝達、連絡の方法	-	-	○ 可能な範囲で確認	1893年地形図&住民ヒアリングより、綿田村は、寺社を中心として、寺、綿田、川の小事に分かれている
2	山林、里山また湖などの管理主体	-	-	○ 可能な範囲で確認	寺：持照寺 / 綿田：新通寺 / 柳原(とちはら)稲荷神社
3	水の管理主体	-	-	○ 可能な範囲で確認	確認できず
4	地域祭礼・年中行事	-	-	○ 可能な範囲で確認	確認できず
5	地域の歴史・物語の伝承	-	-	○ 可能な範囲で確認	集落実見より、石塔寺では、正念寺に令和5年時点での回忌別供養者目録が掲示されていた。一方で、公民館にむら香典(香典返し)などの掲示が掲示されていた。 住民ヒアリングより、綿田町について、柳原稲穂の祭事は現在実施していない。源通寺では真宗・天谷派の集會などを実施(調査当日も実施していた)
6	口伝・通称の地名	-	-	○ 可能な範囲で確認	確認できず
7		-	-	○ 可能な範囲で確認	確認できず

千代田市における情報収集の優先度	情報収集のタイミングと優先度		情報収集の優先度		千代田市における情報収集の優先度
	野産作成時	集落実見時	住民ヒアリング時	集落実見時	
III 千年村チェックリストの視点 交通 一人とモノの往来一 者からの道					浦生野産川村における情報収集の事例 ※考察は文頭に【考察】と記載
1 現在の主要な道路	見当を付けられるとよ い	★ 確認必須	○ 可能な範囲で確認	○ 可能な範囲で確認	石塔寺 綾田町とも1993年地形図の道から大きな変化はなく、古い道が残っているといえる。石塔寺は、八日市産生線に接続しており、おそらく石塔寺見学の自動車のアクセスはこれらの道路が主に利用されている。
2 建設予定の道路の有無	見当を付けられるとよ い	○ 可能な範囲で確認	○ 可能な範囲で確認	○ 可能な範囲で確認	確認できず
3 水道の有無と利用法	見当を付けられるとよ い	★ 該当しなくてはならない 確認必須	○ 可能な範囲で確認	○ 可能な範囲で確認	東近江市道路整備基本計画より、確認できなかった。
4 鉄道の有無 その経緯と現状	見当を付けられるとよ い	○ 可能な範囲で確認	○ 可能な範囲で確認	○ 可能な範囲で確認	確認できず
IV 集落構造 一集落の骨格一 集落の様	見当を付けられるとよ い	★ 確認必須	○ 可能な範囲で確認	○ 可能な範囲で確認	確認できず
1 集落の場所と現状	見当を付けられるとよ い	○ 可能な範囲で確認	○ 可能な範囲で確認	○ 可能な範囲で確認	集落実見より、石塔寺は、石塔寺の参道を中心とし、そこから細い道が分岐しており、それぞれ道沿いに住居が立地していた。綾田町は、寺社を中心として住居が立地している。
2 集落の維持について	見当を付けられるとよ い	○ 可能な範囲で確認	○ 可能な範囲で確認	○ 可能な範囲で確認	確認できず
3 文化・自然遺産の有無	見当を付けられるとよ い	★ 確認必須	○ 可能な範囲で確認	○ 可能な範囲で確認	住民ヒアリングより、綾田町の集落内に工務店はない。
4 集落の型	見当を付けられるとよ い	★ 確認必須	○ 可能な範囲で確認	○ 可能な範囲で確認	住民ヒアリングより、庭から古代～中世まで使用されていた布目瓦がよく出てくること。
5 集落の工夫、 村での発明	見当を付けられるとよ い	★ 確認必須	○ 可能な範囲で確認	○ 可能な範囲で確認	【考察】集落実見より、石塔寺は、石塔寺の参道・分岐した道沿いに集落が立地している。道沿いに集落が立地しているように見える。綾田町は、寺社(特に寺院)を中心として円状に集落が発生し、それが道で繋がれたように見える。
6 集落の型	見当を付けられるとよ い	★ 確認必須	○ 可能な範囲で確認	○ 可能な範囲で確認	下馬淵はため池の中心と道沿いの権限に面が設置されていた。 【考察】道沿いの軒は選好所のように見えなくも、琵琶湖を模しているのかもわからない。

### 3. 蒲生郡桜川村における情報収集・考察例

参考として、筆者の車が調査当日の報告会で割り当てられていた、蒲生郡桜川村の調査で得られた情報を最右列に記載した。

住民ヒアリングは、綺田町綺田の源通寺で調査の当日に行われていた、真宗 大谷派の会合のため駐車場で来客誘導をしていた源通寺職員の方に行った。なお、考察した内容は【考察】と記載した。調査で獲得したファクトと考察は明確に区分する必要があることに留意したい。

### 4. 今回の調査で感じた疾走調査での改善点いくつか

今年度の調査を通じて感じた疾走調査の改善点を記しておく。野帳から当日の進行まで洗練されてはいるが、やり方を変えることでより充実した調査になるのではないか。

- 初参加者に調査内容を説明する際には、調査の目的や視点などの全体像を理解してもらった上で、野帳作成や調査に望んでもらえるようにしたい。(必要があれば上記リストを参照)
- 当日の報告会で、学生含め全員が発見や意見を共有できるようにしたい。時間に限りがあって全員で発言することはできないが、miroなどオンラインホワイトボードツールなどを用いて、それぞれが気軽に情報を共有できるとよいのではないか。
- 地域経営の情報をもう少しヒアリングに寄らない方法で収集したい。

今回の情報収集の視点の整理を通じて、改めて共同体に関する情報収集の難しさを感じた。土居先生の、[2015年度 相模川流域疾走調査報告書](#) (2016) の報告には、「「共同体」を調べるとして、土地条件図のような参照すべき基本情報をどこで入手できるかといえば、まずはその地の自治体史編纂の過程で、公立博物館や大学研究室による調査で、あるいは地元の人々による自発的な取り組みによって、それ相応の水準で重ねられてきた調査記録、といえよう。」とある。集落でのヒアリングも重視した上で、それだけによらない情報収集の方法を考えていけるとよいのではないか。

### 5. 驚きかたのインストールと疾走調査手法のアップデート

今年度の疾走調査のサポートにあたって、過去の資料のひとつとして、[千年村疾走調査・完全マニュアル](#) (2015) に再び目を通した。小林・神保は、「集落への「驚きかた」のアップデート、その相互作用が繰り返されること。実はこれこそが疾走調査の醍醐味なのではないかと筆者は感じている。」と記しており、当時の私も非常に共感した。この言葉を借りれば、今年度調査は未経験者に疾走調査方法を伝えることからスタートしており、驚きかたの「インストール」の側面もあったと言える。来年度以降は、これまで培われてきた調査手法を受け継ぎつつ、驚きかたと調査手法のアップデートを試みていけるとよいの

ではないだろうか。

補注・引用文献

1)千年村プロジェクト. 千年村チェック  
リスト Ver.2.3. 2017

[http://mille-  
vill.org/%E5%8D%83%E5%B9%B4%E6%9D%91  
%E3%83%81%E3%82%A7%E3%83%83%E3%82  
%AF%E3%83%AA%E3%82%B9%E3%83%88/\\_/](http://mille-vill.org/%E5%8D%83%E5%B9%B4%E6%9D%91%E3%83%81%E3%82%A7%E3%83%83%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%82%B9%E3%83%88/)

[Millennium\\_Village\\_Check\\_list\\_for\\_Registration](#)

2)千年村プロジェクト. 2015 年度 相模  
川流域周辺疾走調査報告書. 2016, 57p.

3)小林千尋, 神保洋平.千年村疾走調査・完  
全マニュアル. 2015

[https://www.10plus1.jp/monthly/2015/12/issue-  
02.php](https://www.10plus1.jp/monthly/2015/12/issue-02.php)

甲良町の千年村大字 - 古代から歴史を追える地域の環境要因の分析 -

高橋大樹

池寺山があり、町の東から西に犬上川が流れ、犬上川の堆積作用によって形成された扇状地による平地によって構成される。

(図 31)

1. 甲良町の特徴

今回、筆者は疾走調査の参加が初日のみだったため、重点的に見学した甲良町の千年村大字に関して考察を行う。

甲良町は、滋賀県の中央部を占める犬上郡の中央に位置する。地形・地質の特徴としては、東は鈴鹿山脈の山麓、正楽寺山、

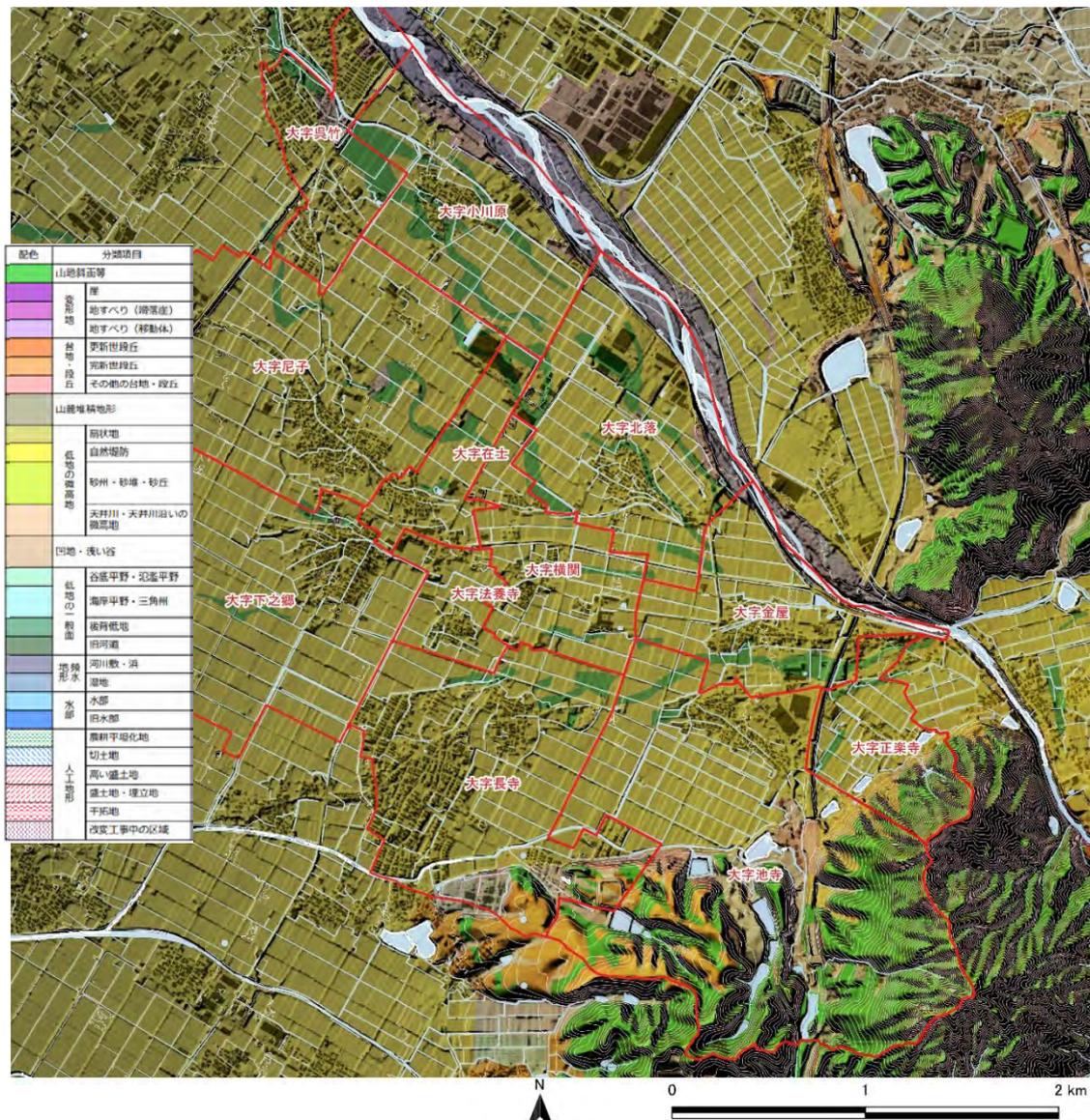


図 20 甲良町の大字と土地条件図(筆者作成)



図 32 甲良町の行政区域の歴史の変遷(筆者作成)

## 2. 甲良町の歴史と領域に関して

甲良町の歴史としては、古代・中世の文献が豊富に残っており、関東の千年村では詳細に追うことのできない中世の様子が確認することができた。そのため、古代、中世、近世と連続した村の姿を浮かび上がらすことができた。図 32 はその変遷をまとめた資料となる。

### ① 古代

正倉院文書や和名類聚抄から甲良町には甲良郷と尼子郷があったと想定される。甲良郷は甲良町一帯を比定地としているため、今回正確な比定はできなかった。一方、尼子郷は6つの大字に比定することができた。平安時代後期にはこの地域一帯が荘園となり、甲良荘と尼子荘という2つの荘園が存在していた。

### ② 中世

1300年ごろ、甲良荘と尼子荘が統合し、甲良荘となった。甲良荘に該当すると想定される大字は現在の甲良町の大字全てを含んでいる。近江国の守護は近江源氏の佐々木氏が務めており、その後佐々木氏が六角氏と京極氏に分かれて勢力を争うようになった。鎌倉時代後期になると、娑婆羅大名として有名な佐々木道誉が現甲良町正楽寺に勝楽寺を創建し、その地に住まうようになった。道誉の孫の高久は尼子郷を領有、その後の戦国大名の尼子氏の源流となるなど、歴史上の登場する人物の関連が多い土地である。

### ③ 近世・近代

甲良荘を構成していた村々はそのまま江戸期の藩政村へと引き継がれた。そ

の後、明治期を迎え、今に至る。

### 3. 犬上川の水利と扇状地大字の地形立地と土地利用

#### ①犬上川の水利の特徴

犬上川の流域面積は流域面積 105.3km<sup>2</sup>と比較的小さく、水源の鈴鹿山系は石灰岩質で保水力に乏しい。そのため、犬上川流域に雨が降れば洪水、照れば干ばつになりやすいという性質があった。加えて、平野部は扇状地帯の特色も持ち、流水が砂礫中に侵入して伏流水となって地底を流れ、表流量に乏しく、甲良の人々は大昔から水不足に悩まされてきた。

#### ②水利の歴史

甲良町犬上川扇状地の開発の歴史は古く、1981年の圃場整備事業以前には条里制が現存していた。開発の古さは水利コントロールの相対的容易さによると考えられるが、同時に流量の少なさも意味する。かつて、甲良荘は「川原の荘」と呼ばれ、水田の水持ちが非常に悪かった。犬上川には井堰が4つ、一の井、ニの井、三の井、四の井があったその対立が根深く、1932年に警察隊数百名出動の大騒動となった。現在は上流に犬上ダムの建設、一の井とニの井の合同井堰の実現によって、紛争はなくなった。

現在でも農業用水は日常の生活用水と活用され、農業用水＝生活用水＝環境用水という一体的な利用がされている。1983年の圃場整備に既存の開水路をパイプライン化する予定だったが、集落内水路の環境悪化と水の文化の喪失に危機感を感じた住民によるまちづくり活動が展開。集落内の水路は開路のまま残し、農業水利に景観形成の視点を持ち込んだ。

#### ③ 扇状地大字の地形立地と土地利用

図1、図3からもわかるように、甲良町の大字は基本的に扇状地に立地している。居住域の立地を見てみると、旧河道の位置を避けた微高地に居住地が立地している。犬上川はかつて甲良の南側を流れていたものが北側へだんだん流路を変えていった。そのため、地形区分としても扇状地南側が古くからできた扇状地のため地形の高低差はあまりなく、北側は地形が新しいため、高低差が大きいといえる。千年村大字が北側に多くみられたのは、地形の高低差が大きく、旧河道の名残を水田利用へと転換しやすかったと考察ができる。

土地利用としては、扇状地上は基本的に水田利用でその他畑作が見られる。山林は山裾にみられ、扇状地には寺社の社寺林程度しかみられなかった。

### 4. 考察

以上の調査より、甲良町の千年村大字の持続性を担保する環境要因・文化要因に関して考察する。

#### ① 扇状地の開発のメリットとデメリットと農業技術の進歩

扇状地は古代からみたら、水の管理がしやすく水田開発の行いやすい土地だったと考えられる。そのため、古くより水田経営がなされていたと考えられる。一方、犬上川扇状地は流域の水分保持力のなさ、扇状地という特性から水不足になりやすい土地のため、時代とともに農業用地が拡大し、農業技術が進歩することで、増えた水田面積に対する水の量が足りなくなったと考えられる。戦後のダム建設に伴い、その問題が解決されたが、

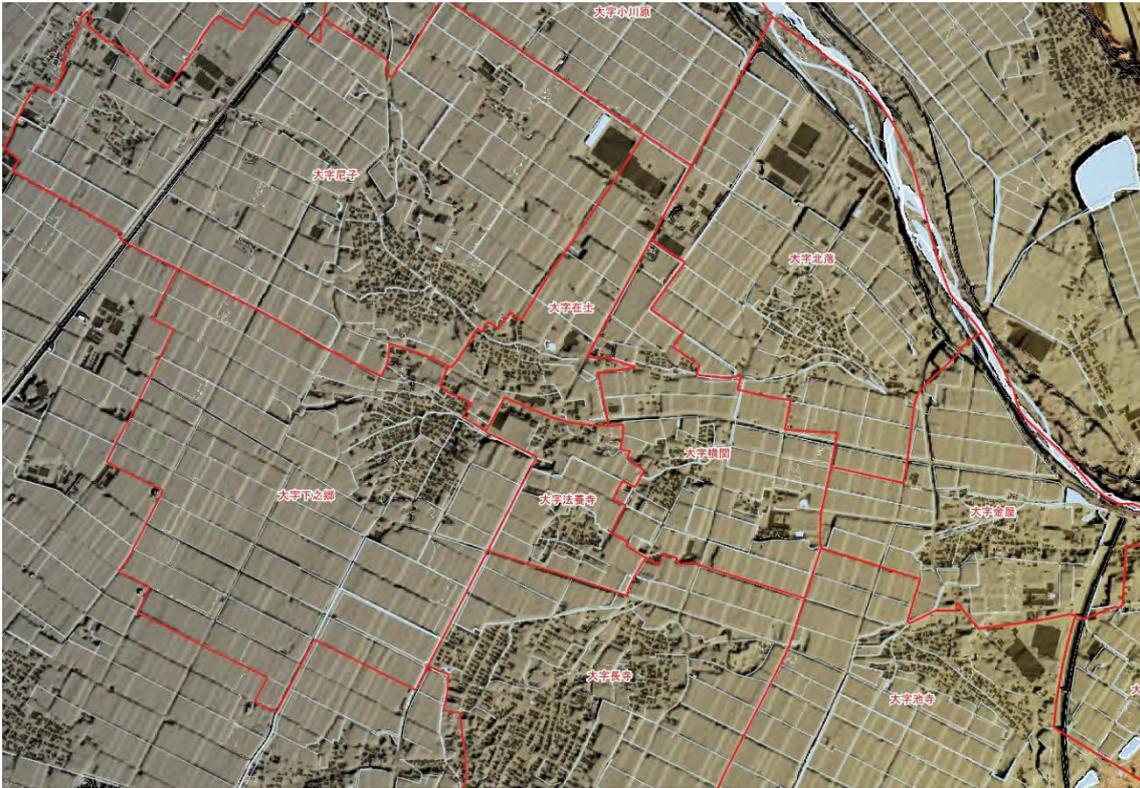


図 33 大字詳細図 微高地上の居住域と水路の関係がよくわかる。

住民にとって水はこの地の最大の問題だったはずである。

### ② 領主の変遷と明確な支配体制

甲良町は中世から明確な領主体制が敷かれた土地であった。またその領主たちがこぞってこの地を重要視し、実際に本拠地にした領主も多かった。これはこの地の豊かな環境や生産性の高い土地、背後に山が近いなど、環境要因に起因するものと考えられる。近江という国は日本の中世の中心に近く色々な領主の動きを詳細にみることができる点が非常に興味深かった。

### ③ 微高地と水利システム

扇状地においても微高地上に居住域立地がみられた。古来よりそういった土地のミクロな情報を読み取り、しっかり土地利用に反映している点は改めて関

心をした。戦後の圃場整備によって、水問題は解決され、現在村々には爽やかな水が流れている。居住域に寄り添う水路は美しく悠久のものだと現地では感じた。ただ、歴史を紐解くと見た目の美しさ以上に水との戦いがあった。今後もまちの背景をしっかりと読み取り、外見だけでない風景の読み取りをこころがけて調査を行いたいと感じた。

### 引用文献

- 1) 甲良町町史 1984年
- 2) 角川日本地名大辞典 25 滋賀県 角川書店、1979年
- 3) 琵琶湖流域を読む〈上〉—多様な河川世界へのガイドブック 琵琶湖流域研究会 2003年

## 第6章 付記

### ■教員・調査協力者

中谷礼仁(歴史工学/早稲田大学教授)

木下剛(造園学/千葉大学大学院教授)

石川初(環境情報学/慶應義塾大学大学院教授)

福島加津也(建築家/東京都市大学教授)

林憲吾(東京大学生産技術研究所准教授)

川井操(滋賀県立大学准教授)

田熊隆樹(早稲田大学 中谷礼仁研究室 OB)

松木直人(早稲田大学 中谷礼仁研究室 OB)

金盛晋也(千葉大学 木下剛研究室 OB)

近藤真(千葉大学 木下剛研究室 OB)

高橋大樹(千葉大学 木下剛研究室 OB)

### ■学生

#### 【早稲田大学】

碓井颯・口石直道・戸田剣・張沛齊

#### 【千葉大学】

翁泰河・秋山天・関口真輝・小林聖也・池尾結衣・猪瀬真央・酒田祥佳

#### 【慶應義塾大学】

大国絢美・飛川優・梁欣儀・萩原世・安永楓哉・原田馨子・羽賀優希・伊藤侑世・中村美佐・茂木真琴・三宅佳穂・中村文音

#### 【東京都市大学】

五十嵐翔輝・山本莉香・水野誉也・石田慶太・西村知也・片岡空良・梅田晃一郎・花森葵

#### 【東京大学】

姜婷格、張心璇、高井千春、神田芽ぶき

#### 【滋賀県立大学】

寺村安也乃・澤木花音・上紺屋佑真・福岡泰宏・竹岡真央・近藤草石・竹内咲佑美

#### 【横浜国立大学】

松下琴莉

#### 【立正大学】

奥村敦至

## 第7章 謝辞

琵琶湖湖東を疾走調査するにあたり、調査対象地である10か所の集落とその周辺の地域にお住まいの方々には大変お世話になりました。心より感謝いたします。

---

2023年3月31日発行

## 2023年度琵琶湖湖東疾走調査報告書

### 著作・編集

早稲田大学理工学術院 創造理工学部建築学科 建築史研究室 中谷礼仁研究室  
千葉大学大学院 園芸学研究科 緑地環境学コース  
環境造園領域 都市環境デザイン学研究グループ 木下剛研究室  
慶應義塾大学環 環境情報学部 石川初研究室  
東京都市大学 建築都市デザイン学部 建築学科 福島加津也研究室  
東京大学生産技術研究所 林憲吾研究室  
滋賀県立大学 環境科学部 環境建築デザイン学科 川井操研究室  
田熊隆樹  
松木直人  
高橋大樹  
金盛晋也  
近藤真  
東京大学 神田芽ぶき  
横浜国立大学 松下琴莉  
立正大学 奥村敦至

### 発行

千年村プロジェクト

関東地域活動拠点

早稲田大学理工学術院 創造理工学部 建築学科 中谷礼仁研究室

〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1 55N-8-9

Tel. 03-5286-2496

---